世界を周るは転生者(チート) ｉｎリリカルなのは

チルノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界を周るは転生者（チート）ｉｎリリカルなのは

【Ｎコード】
Ｎ６３８４Ｚ

【作者名】
チルノ

【あらすじ】
普通の高校生だった転生生活を強いられた。そんな生活をはじめて６００年！桜花君がリリカルな世界に転生、色んな力をこの６００年で色んな世界で習得しチート化！
さて、介入を決めた桜花君。どうなるんでしょうね？

勝てるのかな？なのは達。

プロローグ（前書き）

どうも！よろしくです。

プロローグ

どうも、俺の名前は風華　桜花　現役2年の高校生だぜ！

そんな俺は今、一つの問題に直面している。

それは、ここはどこだ！と言うコトだ

桜花「・・・ん～、確か俺は学校の帰りに・・本屋によって・・・立ち読みしてたら・・！！」

桜花「そうか！俺死んだ！！」

??「その通りです！」

??「え～・・会話はめんどくさいんで一方的に喋りますよ！」

??「貴方は死にまして・・それは私どものミス、貴方はまだ死ぬべき人ではないのです」

??「なので私どもはお詫びとして転生をプレゼントしようと思います「ちょ・・話聞いて・・」！！」

??「申し遅れましたが私は、神様です。」

??「それで転生の事ですが、貴方は生前、アニメや漫画が大層お好きだったようなので様々なアニメの世界に転生してもらうことにしました。」

神様「それで、アニメの世界と言ってもランダムに送られるのです

ぐに死んでしまう可能性もあるわけです。」

神様「そこで、特典として貴方に二三能力を与える事にしました。」

神様「与えられる基本能力は、あらゆる力を操る能力です。」

神様「これは、貴方や貴方の周囲の物のあらゆる力を操ることができます。」

神様「次に、身体能力の最強化。」

神様「これは、文字通り貴方の身体能力を他の追随を許さないほどに強化させます。」

神様「最後に・・・そうですね、可愛い娘に縁があるくらいの恩恵をあげます。」

神様「まあ？これは縁があるだけで、モテるわけじゃないですけどね！ざまーみろ！」

神様「まあ、こんなもんですかね。」

神様「んじゃあ、そろそろ行って来て下さい！あ、その世界で死ぬか物語を終えることで次の世界に赤ん坊になって転生、またはその世界によっては今の年齢で転生します。世界ごとに得た力や経験は引き継がれるので安心して下さい。容姿については転生ごとに変わりますんでよろしく」

神様「それじゃ、逝ってらっしゃい！」

パカッ・・・ヒュ〜

・・俺は思った、一方的すぎる神様にただ一言”死ね”と・・・

プロローグ（後書き）

はじまります。

プロローグ2（前書き）

よろしくです。

プロローグ2

え～、前回神様から転生生活を贈られた風華桜花です。
現在５つくらい世界をまたいできました。（作者の都合だよ！）
で、現在６つ目（読者的には一つ目だよ！）の世界魔法少女リリカルなのはの世界に送られてきました。
容姿は、９歳になっているようです。
世界をまたいでいく内に能力的にもチートに磨きがかかってきました。ま、それは追々公開していくとして。

桜花「ん～・・家がない、ホテルに住もうにも金がない、野宿しようにも外寒い。」

どうしよう？

桜花「とりあえず現状確認だね」

えと・・この町は鳴海市で、此処は多分なのはの小さい時描写されてた公園だろう・・
現在の所持品は・・今着てる服・・終わり！？・・・ん？手紙？
何々・・・

―――桜花へ

私は神です。

貴方はリリカルなのはの世界では独り暮らしとなっています。家の地図は入れておきました。

貴方の口座もあります。お金も入れてありますので自由にお使いください。

現在は原作三日前です。

P・S
一応ステータスで魔力EXランクを追加しておきました。
デバイスは・・・作れるでしょ？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

桜花「ふむ・・まあ、これだけしてくれればいいっしょ。んじゃ家に帰りますか。」

で、今家に到着！

桜花「ん・・どうしようかな原作介入しようかな・・でもそろそろ休みたい。」

今は原作に介入するか迷っている。
まあ、今同時進行でデバイス作ってんだけどね！
能力フル稼働させた最強デバイスだぜ！

桜花「ん、完成！」

桜花「まあ、巻き込まれた時にしか使わないけど。・・起動！」

『起動完了、マスター承認、風華桜花様。名前を付けてください。』

桜花「ん～・・・イカロスでどうよ？」

『承認、現時点を持って私の名前はイカロスです。よろしくお願いしますマイマスター』

桜花「おう、早速だけど。この町全体に存在するロストロギア、ジュエルシードを探してくんない？」

イカロス『了解です。ちょっとお待ちを・・・・完了！21個のジュエルシードの場所をサーチしました。地図に出します』

すると、イカロスの上にデジタルな画面が現れた。鳴海市の地図の様だ点々と赤い点がある。

桜花「この赤いとこにあんの？」

イカロス『はい、現在はまだ発動はしてないようですね。』

桜花「ん～どうしようか？集めてしっちゃかめっちゃかかきまわす？」

イカロス『いいんじゃないでしょうか？管理局が慌てふためくところを見るのは楽しそうです。』

こいつ結構なスピードで人格形成してんな。ま、いいか

桜花「んじゃ、今から集めに行こうか。」

イカロス『了解』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

桜花「お、あったあった。これで何個目だっけ？」

イカロス『20個目ですね。あと1個はおそらく発掘者の淫獣が持ってるんでしょう』

桜花「お前、原作知識持ってるだろ？淫獣ってｗ」

イカロス『マスターの知識は作成された時に能力と一緒に流れてきましたから。』

桜花「へー、んじゃ帰るか。」

イカロス『はい、それにしてもこれからどうするんですか？』

桜花「ん？管理局となのはそれにフェイト陣にジュエルシードちらつかせて遊ぶ。」

イカロス『具体的にはどのようにしてですか？』

桜花「ん？一個ずつ発動させて、回収させせんだよ。」

イカロス『ちょｗマスター、それってｗｗ』

桜花「ふふふ・・そう、完璧な悪役だぜ」

イカロス『まあ、マスターがその気になれば地球終わりですもんね。

』

桜花「まあ、そうだよね。世界を終わらす程度の能力とか作れば一瞬だよね。やんないけど」

イカロス『私、今ほどマスターの味方側でよかったと思いました。』

桜花「そう？まあ、これから楽しんでいこうか。」

もう夜になっている。

暗いし帰って寝よう。原作まであと2日あるし。淫獣の念話が聞こえたらジュエルシードを思念体で発動して原作開始だね。

それにしても俺結構無敵すぎない？

プロローグ2（後書き）

次は主人公紹介です

主人公紹介（前書き）

チートすぎますね、はい

主人公紹介

・主人公紹介

名前：風華　桜花

性別：男

容姿：そこそこカッコいい（上の中＋ってとこ）

性格：かなりマイペース。ピンチでも焦ったりせず逆に笑う感じ
常に余裕を持っている。

能力：あらゆる力を操る程度の能力。

この能力により、現在は

・地球を割れるほどの力

・光速に近いほどのスピード

・ビックバンでも傷つかない肉体

を身体能力底上げでＧＥＴ。
さらに

・常に５００手くらい先読みできる洞察力

・某ＩＳの天才博士やジェイルスカリエッティの数十倍もの頭脳

・誰をも魅了する歌唱力
・初対面でも5人に3人は一目惚れする魅力
を頭脳・才能底上げでＧＥＴ
能力的には
・第一の世界　けいおん！で歌唱力や演奏力を世界一レベルで習得
・第二の世界　めだかボックスで異常・過負荷を全て習得
・第三の世界　とある魔術世界で全魔術・超能力・原石能力おまけで幻想殺しを習得
・第四の世界　ＢＬＥＡＣＨ世界で死神化、虚化、鬼道、フルブリングを習得
・第五の世界　戯言シリーズ世界で曲弦糸、ナイフ使い、音使い、一喰い等習得
って感じ
魔力ランク：ＥＸ
空戦ランク：ＥＸ
陸戦ランク：ＥＸ

魔力量：ＥＸ

作った能力

・時を操る程度の能力

・重力を操る程度の能力

・見た技能を習得する程度の能力

・境界を操る程度の能力

・空を飛ぶ程度の能力

作った物

・色んな宝具（王の財宝も作り入れてある）

・スペルカード

・デバイス『イカロス』

・家の家具や調理道具

・デバイス

名前：イカロス

ＡＩ搭載のインテリジェンスデバイス

機能

・地球全土を覆える探索機能

・管理局を一瞬で乗っ取れるハッキング機能

・桜花の全力に耐えられるリミッター機能（現在５つのリミッター稼働）

・桜花のサポート機能

性格：桜花と同じでマイペース。結構人を弄るのが好き

備考

桜花の能力によって作られた最高のデバイス。
よって、桜花の使用時にのみ桜花の作成した能力のみ自由に使用できる。
例をあげるなら、桜花のピンチ時に時を操り程度の能力で助けたりできると言うこと。

主人公紹介（後書き）

チートすぎますねハイ！
後悔はしていない。無双はほどほどにしますゆえ・・
あ、第2～5までの世界もいずれ書きたいと思います。
第1は・・気が向いたら・・きっと・・

桜花君の介入スタート☆（前書き）

介入しました。
一応言うと作者はフェイト好きです。
ですが別になのはが嫌いなわけではありません。
弄るのに最適なキャラなだけです。

桜花君の介入スタート☆

どうも、桜花君です！前回、原作介入を決め原作開始前にジュエルシードを全て回収すると言う暴挙を犯しました！

んで、昨晩ついにあの淫獣からの念話が入りました。ははは！バカなことを！！

桜花「おし、んじゃイカロスや。まずはジュエルシードについて考察してみようか。」

イカロス『はい？それはつまりどうゆうことです？』

桜花「うん、まず原作だとさ？生き物達の願いや魔力を流すと暴走と言う形で発動したよね？」

イカロス『ああ、確かにそうですね』

桜花「でも、基本これは願いを叶えるっつー用途で有ってるはずなんだよ。」

イカロス『はい？それは・・つまり？』

桜花「つまり、これは正しい順序で発動させればちゃんと願いをかなえてくれるんだよ！」

イカロス『な・・なんだってー！』

桜花「こいつの正しい使い方は、正しい量の魔力を正しい順番で２

１個のジュエルシードに注入していくことなんだよ。」

イカロス『なんでそんなこと知ってるんですか？』

桜花「うん？答えを知る程度の能力を作った。まあ、一回使用したら消えたけど。」

イカロス『うわ、ずるい』

桜花「まあ、置いといて。ジュエルシードについては終わった。とりあえず正体を隠してジュエルシードをバラまくよ！」

イカロス『Ｙｅｓ，ｓｉｒ』

桜花「さて今晩、思念体化させてなのはを襲わせようか」

桜花「この物語、面白おかしくかきまわしてやんよ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

～夜、なのはｓｉｄｅ～

今、私は昼間に助けたフェレットさんに呼ばれて動物病院にきたのそしたらフェレットさんは喋りだすし、黒い何かが襲ってきたの

なのは「うにゃ～～～！どうすればいいの～！！？」

ユーノ「これを！僕の言うとおりにして！」

なのは「赤い・・宝石？」

ユーノ「僕に続けて唱えて！」

なのは「え？え？う・・うん！分かったの！」

もうどうにでもなれなの・・

～呪文割愛（呪文覚えてないんだよ！）～

カッ！！

なのは「ええ～～～！！？」

気づいたら、思い浮かべたとおりの格好になってたの

ユーノ「すごい魔力だ・・！！？来た！！！」

驚いてたら、黒いなにかが襲ってきた

思わず目をつむり衝撃に備えてたら。

？？「つまんね。もういいや戻れ。」

そんな声がして目をあけるとそこには私と同い年くらいの男の子が

狐のお面をつけてそこに居たの

そして次の瞬間、黒い何かは綺麗な青い宝石になってその子の手に

収まったの。

～なのはｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～桜花ｓｉｄｅ～

さて、見ていたんだが・・原作と違ってなんか弱い。あの悪魔・・つまらん！！！

んで介入！

桜花「つまんね。もういいや戻れ。」

つってジュエルシードを回収。速攻で去る

その際にユーノの持ってるジュエルシードを超高速で回収し見えるようにして去る。

ユーノ「！？なんで全てのジュエルシードを！！！？」

だが聞く耳もたない！グッバイ！！

桜花「ふはははははは！これが欲しけりゃ奪いに来いやバーカ！！！！」

ちらっと隠れてる奴にも目を向ける。

んん？原作と違う点はかなりあるみたいだな・・

あんなところにフェイトとアルフがいやがる・・・

桜花「・・・イカロス、転移。フェイトん家」

イカロス『了解・・転移』

フェイトん家で待つとしますか。

・・・フェイト家・・・

桜花「さて・・そろそろ帰ってきてもよさそうなんだけどな・・ん？来たか」

がちゃ・・・

フェイト「・・・ただいま」

アルフ「は～お腹空いたねぇ！」

てく・・てく・・てく・・がちゃ

桜花「はろー！マイエンジェルフェイトちゃん。初めまして間近でみると一層可愛いね！」

フェイト「！？」

アルフ「あんた！！？」

桜花「そう身構えんなよ、ほらそこに座れアルフ。あ、フェイトはこっち」

とりあえずアルフは警戒しながらもソファに座る。でフェイトは俺の膝に座らせる。

フェイト「？・・・ッ！！？／／／／」

アルフ「なんで、フェイトをそこに座らせるんだい！！」

桜花「アルフよ、お前はフェイトを不細工とでも思ってるのか？」

アルフ「そんなわけない！！フェイトは世界一可愛い美少女だよ！！！！」

桜花「だろう？つまりそういうことだ。」

アルフ「そうか・・そういうことか・・なら納得・・出来るかい！！！」

桜花「まあいいじゃろ。とりあえず落ち着きんさい。」

アルフ「む・・なんなんだい・・あんたは・・」

フェイト「え・・えと・・私このままなの？／／／／」

桜花「ふむ・・むぎゅ～～！うんこの抱き心地は最高なり～♪」

とりあえずフェイトを抱きしめる。うむ最高！！！

フェイト「ッッッ！！！？／／／／／／」ぼん！

桜花「あらら、真っ赤だね～」

桜花「んじゃ、話しをしようか。まずアルフとフェイトに言っておく」

フェイト「／／／・・な・・なに？」

アルフ「なんだい？とりあえずフェイトから離れろ」

桜花「断る。・・一つ、俺はお前たちが何の目的でジュエルシードを求めているか知っている。」

アルフフェイト「「！！！！？？」」

桜花「二つ、俺はジュエルシードを全て・・持っている」コトッテーブルに偽ジュエルシードが全て入った瓶を置く。

フェイト「ッ・・それで、どうするんですか・・？」

桜花「・・・・」

アルフ「どうなんだい・・！」

二人ともなんか敵意全開でこっち見てるなあ・・ふむ

桜花「特に、なにもない！！」

がしゃああ！！

桜花「なに転んでんだよアルフ。」

フェイト？俺が抱きしめてるから転ばないよ？

フェイト「じゃあ、何しにここに？」

桜花「ん～？大好きなフェイトに会いに来たんだよ。」にこっ

フェイト「ッ！！？／／／／／／／／」

桜花「さてと・・よっ」

フェイトを座らせて俺は立ち上がり偽ジュエルシードを回収、そしてログアウト

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

～桜花の家～

桜花「さて・・んじゃ改めて。今日はアニメでやったジュエルシード発動地点にジュエルシードを置いてきた。」

桜花「そんで、悪魔の初戦を見てフェイトの家にお邪魔。んで今帰ってきたと・・もう午前1時か・・寝よう」

イカロス『では、あとの処理は私がやっておきますね。』

桜花「ん、おねが～い。明日からはとりあえず観戦して、予定としては管理局になのはと協力関係になればいいか。」

イカロス『ふむ、表では悪魔の友人として管理局と手を組み、裏ではお面装着敵役として暗躍と言うわけですね』

桜花「ｚｚｚｚ・・・・」

イカロス『寝ましたか・・おやすみなさいマスター。』

イカロス『とりあえず、悪魔とフェイトさんのデバイスにメッセージを送りましょう。』

メッセージ内容

――とりあえずジュエルシードを町にバラまいたから回収したけりゃしてみろ白い悪魔（笑）・・・なのは宛て

ー－私のマスターがジュエルシードを町に配置したので回収をお願いします。マスターも貴方の目的が達成されるのを心待ちにしております。では御武運を・・・フェイト宛て

イカロス『ぷｗｗ・・ざまみろ悪魔！』

悪魔じゃないの！！

イカロス『なんか・・今、電波が・・気のせいですか。』

桜花君の介入スタート☆（後書き）

次は、フェイトとなのはの勝負です。

桜花君の転入となのはの初封印（前書き）

桜花くんの性格がけいおん！と違いますがそれは、転生の結果です。
容姿と一緒に性格も変わりますね。
だって、何年も生きてたら性格だって歪むでしょ？

桜花君の転入となのはの初封印

はいどうも、桜花君です。
前回、いろいろとお膳立てしてしました。具体的には原作を初っ端からブチ壊しました。
んで、日が明けて今日・・つまり、なのはのジュエルシード神社戦の日の朝。

桜花「桜花君は、とりあえず学校に行くことにしましたよっと」

イカロス『マスター・・誰に言ってるんですか？』

桜花「こっちの話だ。にしても俺って今9歳なんだよな〜・・仕方ないか」

イカロス『では、やはり聖祥大へ？』

桜花「うん、転入するわ。とりあえず手続きは神さんの方でやってくれたみたいだし。」

今、俺の手には転入手続きの書類がある。

桜花「んじゃ、行きますか。」

・・・・・・・・・・・・・・・

なのは視点

今日は、私のクラスに転入生がくる見たいです。

アリサ「どんな奴かしらね？例の転入生」
なのは「う～ん・・でも、お友達になれるといいな！」
すずか「そうだね～！」
とこんな感じですずかちゃんとアリサちゃんと話してたら。
バンッ！！
って音がして。
桜花「ちーす！！三河屋でーす！！！！！！」
・・・はっ！思わず唖然としちゃったの
でもそれは皆おんなじみたいで全員あんぐりしてるの。
桜花「う～む・・インパクトがなかったか・・面白くないな～・・・
うん！」
桜花「悪い、やり直すわ。んじゃまたね！」
ピシャン！！
なのは「な・・なんだったの？」
アリサ「インパクトならありすぎたわ・・」
すずか「もしかして今のが転入生君かな・・？」

正直、凄い子だな～と思いました。

・・・１０分後・・・

・・ガラッ！

皆「ビクッ！！？」

先生「え？ど・・どうしたの？皆？」

皆「「「「いえ、なんでもないです。」」」」

息ぴったりなの・・

先生「そ、そうですか？ではＨＲを始めます。まずはじめに転入生を紹介します。」

皆「「「「・・・・・・・・」」」」

先生「あ、あれ？どうしたの皆？嬉しくないの？」あわあわ

先生「・・・ま、まあいいです。それじゃ入ってきて。」

シーン・・・

先生「あれ？おかしいわね・・」てくてく

ガラッ・・キョロキョロ

先生「あれ～？・・どこに・・？」

先生がドアの外を探していると、いきなり

桜花「はい、ではＨＲの続きと行きましょう。まずは私の自己紹介からですね！」

ってさっきの子が教卓で流れるようにＨＲを始めたの。

先生、皆「「「「「「ええ！？いつの間に！！！！？」」」」」

桜花「え～私の名前は、風華　桜花と言います。桜花君と呼びなさい！」

先生、皆「「「「「いや！スルーしないで！！！」」」」

そして、さりげなく命令形なの・・

なのは「色んな意味で凄い子なの・・」

桜花「む！そこの茶髪ツインテール！！」

なのは「ふえ！？な、なにかな！？」

桜花「いや、特になんでもない。」

なのは「ないの！！？」

桜花「それじゃ、質問タイム～残り5分しかないからちゃちゃっと進めようか！」

なのは「無視しないで～！！」

つ・・疲れる！この子凄く疲れるの！！

女子A「好きな食べ物は？」

桜花「わたあめ」

なのは「可愛い！！？」

女子B「好きな教科は？」

桜花「闇の魔術に対するb「言わせないの！！」――実技だ！」

女子C「どこから来たの？」

桜花「遠い異世界から！」

女子D「好きな子はいるの？」

桜花「内緒☆」

女子E「じゃあ、このクラスでタイプなのは？」

桜花「ふむ・・・」すっ

はあ・・はあ・・はあ・・この子発言が突発的すぎるの・・ん？

桜花君？がクラスを見渡してる・・あ、眼があった。

桜花「俺の好みはあそこの茶髪ツインテール、」

なのは「え！？えええ！？」

桜花「の右斜め後ろあたりの金髪さんだな」

なのは「紛らわしいの！！！」

アリサ「そして私！？／／／」

桜花「ま！好きなわけではないがな！！！あくまで好みと言う話だ！うぬぼれるなよ金髪！！！」

アリサ「アンタねえええええええ！！！！私は金髪じゃなくてアリサ・バニングスって名前があんのよ！！」

なのは「怒るところはそこなの！？アリサちゃん！！」

桜花「あ、時間だ。じゃあ、ＨＲを終わりまーす。日直さんごーれい」

日直「きりーつ、れい、ちゃくせき～」

なのは「なんでそんなに冷静に号令が出来るの！？」

こんなかんじで嵐の様なＨＲが終わった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

～昼休み～

桜花視点

桜花「いや～、うんとっても面白かったな～」

なのは「なんで、私のところに来るの・・」

桜花「ん？オマエは結構面白くいからね」

なのは「そうなの・・それと私の名前は高町なのはだよ。なのはって呼んで」

桜花「なのはねえ・・だが断る」

なのは「なんでえ！？」

アリサ「アンタ達なに漫才してんのよ」

すずか「桜花君はおもしろいね。」

桜花「ははは、誰よりも面白い人生を過ごしてますから！」

転生とか転生とか転生とか・・・

なのは「へー・・でも最初っからぶっ飛びすぎなの！」

アリサ「確かに、あのＨＲは凄かったわ・・」

桜花「いやだってよ？あのくらいインパクトあればとりあえず第一

印象は強烈なものになんだろ？」

すずか「た、確かに強烈だったけど。」

桜花「それにしてもだ、にゃのはよ」

なのは「なのはだよ！！」

桜花「うん、話を聞こうぜにゃのは」

なのは「な・の・は！！！」

桜花「にゃのは・・お前は話しを聞けんのか？」

なのは「ＮＡ☆ＮＯ☆ＨＡ！！！！」

桜花「こいつ面白いな？」

アリサ「なのは壊れてんじゃない！！」

桜花「ま、いいじゃん？とりあえずその手に持ったお弁当は食べないのか？そろそろ時間がないぞ？」

すずか「あ、いけない！はやく食べよう！アリサちゃん！なのはちゃん！」

桜花「俺の名前がないというせつなさ・・」

アリサ「いいのよ。アンタの名前なんてなくても！」

桜花「だけど気にしない！それが俺のジャスティス！！」

なのは「もう・・どうでもいいの・・」むぐむぐ・・

おやおや・・暗くなりすぎてなのはさんほっぺたにご飯粒をつけてますよ。

桜花「なのは、ほらご飯粒ついてるぞ？」ひょいぱく

なのは「ふええ!?／／／／／」

桜花「んん？どうした？顔が赤い・・ああ、悪い恥ずかしかったか？」

なのは「ふえ・・ええええ・・／／／／」

桜花「結構純粋なんだな！」にこっ

アリサ「むぐっ!?／／／／／(こいつ、結構カッコいい・・)」

すずか「んん！！／／／／(桜花君の笑顔・・・すごい！)」

なんやかんやで、フラグを建てる桜花くんなのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

～放課後～

桜花「さて・・そろそろなのはとユーノが来るころかな？」

カッ！

イカロス『発動しましたね。ジュエルシード』

桜花「うん。ん？あ、来たよなの・・悪魔さんがw」

なのは視点

なのは「悪魔じゃないもん！！」

ユーノ「ど、どうしたのなのは？」

なのは「いや、なんか悪魔って言われた気がして・・なんでもないの！」

ユーノ「そ、そう？・・！！みてなのは！あれ！」

なのは「え！？何あれ！？」

ユーノ「生物を介して発動してる！本体がある分強いよ！」

犬？「ぐううううっるるるる・・・」じりじり

ユーノ「なのは！早く変身を！！」

なのは「え！？ど、どうやって？」

ユーノ「呪文！昨日教えた呪文を唱えて！」

なのは「う、うん！・・・って覚えてないよあんな長いの！」

ユーノ「えええ！？・・・仕方ない！もう一度言うから続けて！」

なのは「分かったの！」

犬？「がああああああああ！！！！！」ばっ

なのは「きゃあああああ！！！」

レイジングハート『Ｓｅｔ　ｕｐ！』

カッ！

レイジングハート『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』
（以下レイハ、そんで日本語）
がきいいん！！！！

なのは「う・・うん？あ、変身出来てる！レイジングハートありがとう！！」

レイハ『いえ、なんてことありません。』

犬？「がああああ！！」

ユーノ「なのは！はやく封印を！」

なのは「う、うん！リリカル！マジカル！ジュエルシード！封印！」

犬？「が・・がああ・・うううう・・・」ぱたっ

なのは「・・・ふう。やったねユーノくん！」

ユーノ「うん、お疲れ様！なのは」

なのは「でも、この宝石どうすればいいの？」

ユーノ「レイジングハートで触れて。そうすれば勝手にしまわれるから」

ぽん。きゅいん！

なのは「これでいいの？」

ユーノ「うん、じゃあ帰ろうなのは。」

なのは「うん！」

桜花視点

桜花「う～ん・・どう？イカロス？」

イカロス『はい、ばっちり高画質で映像に残しました！』

桜花「将来、見せたらどうなるか楽しみだね！」

イカロス『マスターも人が悪いｗｗ』

桜花「そしたら頼んでも無いのに高画質で撮ったお前もなw」

桜花「じゃあ、帰ろっか」

イカロス『了解です。』

桜花君の転入となのはの初封印（後書き）

桜花君は楽しむことしか考えていません。
原作をばっちり知ってるのにね！

桜花君のなのはの初戦闘介入（前書き）

なんか戦闘描写がおかしい！！
文才が欲しいよ！サンタさ――――――ん！！！

桜花君のなのはの初戦闘介入

桜花視点

どうも、桜花君です。
転校してきてから数日。なのは達とも仲が良くなり、一緒にお昼を食べるほどになりました。
で、今現在もご飯中であります。

桜花「え？すずかん家？」

アリサ「そう、今日行くからアンタも行く？」

すずか「桜花君はなにか予定があるのかな？」

桜花「ん～別にないな。」

なのは「じゃあ、行こうよ！」

桜花「ははは、だが断る！！！」

なのは「なんでえ！！？」

桜花「今日は家に帰ったらパソコン眺めてニヤニヤしながら過ごすんだ！」

アリサ「それはただのニートよ！！」

桜花「貴様！ニートの何が悪いと言うんだ！」

アリサ「働かないで周りに迷惑をかける所よ！！」

桜花「ま、冗談は置いといて。すずかん家知らないんだけど？」

すずか「あ、じゃあ迎えに行くよ～」

アリサ「無視すんなーーー！！！！」

なのは「やっぱり、疲れるの・・」

ははは、なのはそれくらいで疲れてたらこの先やってけないぜ？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・

～桜花家～

桜花「さて、今日はすずかの家に行くことになったよ！」

イカロス『ではついにフェイトさんと？』

桜花「うん、悪魔が衝突するな。」

イカロス『ではどうするおつもりです？』

桜花「ん？割り込んでどっちも墜とす」

イカロス『マスター、鬼畜ですね！』

桜花「大丈夫！本人たちの感覚じゃいつのまにか墜ちてる感じだから」

イカロス『ちょ、強すぎマスターｗｗ』

桜花「ん？来たかな？」

ぴんぽーん！

桜花「はーい、今開けますよー」がちゃ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

～車内～

桜花「でだ、なのはよ。」

なのは「なにがでなのか分からないけど・・なに？」

桜花「あんさんの兄ちゃんがうちんことヤラシイ眼で見るんやけど・・そういう趣味の人なん？」

なのは「いきなり関西弁！？って・・ええ！？お兄ちゃん！そういう人だったの！？」

恭也「ち、違うぞ！なのは！誤解だ！」

桜花「またまた～見てたんはほんまやん！」

恭也「確かに君の事を見ていたが「やっぱりそうなの！お兄ちゃん！」だから誤解だなのは！！」

桜花「やばいこの兄妹まじ面白い」

恭也「く・・調子が狂う・・おい君！なのはに手を出したら承知しないからな！」

桜花「なんや、なのはなんぞ相手せんと、僕だけを見ろゆうことかいな？」

恭也「なっ！？そんなわけ「お兄ちゃん・・気持ち悪いよ・・」ーーぐはっ！！」

桜花「なんだ、ただのシスコンか」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

～すずか邸～

桜花「いや～おっきいな～」

すずか「そう？そんなことないよ。それにしても・・」ちら

恭也「・・・・」ズーン

すずか「ねえ、桜花君・・恭也さんは・・「すずか、見ちゃだめ！

あーゆーのはほっときなさい！」・・うん」

なのは「ねえ、桜花君。さっきのお兄ちゃんの事なんだけど・・」

桜花「なんだ、あれは冗談だぞ？だから安心しろ。」

なのは「ほっ・・よかったの・・割と本気で」

恭也「・・・はっ、俺はなにを・・」

桜花「んじゃ、シスコンも起きたことだし。入ろうか」

すずか「あ、うん。ついてきて～」

・・・

猫「にゃ～」

桜花「ほほう、お前の名前はハルというのか、良い名前だな。ん？そうか主人につけてもらったのか。よかったな」

なのは「猫と話してるの・・」

すずか「名前もあってるし・・私が付けたのも当たってる・・」

なのはすずか「「（桜花君って・・何者？）」」

ま、そんなこんなでお茶タイム。

途中でアリサも加わり、賑やかになった。でアリサとなのはをからかってたら、空気だった淫獣ユーノとなのはが何かに気づいたようで、原作通り森へ入ってった。

アリサ「なのは・・大丈夫かしら。」

桜花「なら俺に任せろ！アリサよ！冒険ついでになのはとあのフェレットを連れ戻してくるから！」

そういって俺も森へ入って行った。

～森の中～

猫「にゃあああああおお！」

桜花「おお～でかいな～・・おっとお面お面・・装着！」

そういえばフェイトの家じゃ、はずしてたなコレ・・まいっか♪

桜花「とりあえず、現在進行形であの二人が戦ってるわけですが・・」

イカロス『そういえばマスター、観戦するんじゃなかったんですか？』

桜花「ん、気が変わった。ていうか読者もそろそろ戦闘とかチート無双が見たいんだよ」

イカロス『メタ発言全開ですね。もう少し控えてください』

桜花「善処しますよ。んじゃ行こうか！」

イカロス『Ｓｅｔ　ｕｐ！』

桜花「おおう！？いきなりセットアップすんなよ、びっくりするだろ！？」

イカロス『マスター、ここはリリカルなのはなんですからちゃんとバリアジャケット着て下さい。』

桜花「それにしても・・これが俺のバリアジャケットか・・なんか和風だな？」

俺のバリアジャケットは上に某死神漫画の隊長羽織っぽいのを着て腰を緑色の帯で軽く縛ってある。
下には青黒い袴をはいていて、後ろに羽織がはためいてる・・なんかマジ和風というかこれでホントにバリアできんの？
って感じだ・・

桜花「ま、いっか。お面にも合うし」

イカロス『そんなことはいいですから、やるなら早くしましょう』

桜花「ＯＫ。んじゃ初魔法行きますか！イカロス光速砲撃シフト発動！」

イカロス『了解、光速砲撃Ｓｅｔ　ｕｐ！』

桜花「収束開始♪」

イカロス『ターゲットロック、収束・・・・・・・・完了！』

桜花「んじゃ、二人には墜ちてもらうよ！バースト！！」

イカロス『光の魔弾（レイ・キャノン）！！』

・・・

わたしは、出てきたあの子に追撃しようとした。
そしたら、いつまにか私は光に包まれて地面に向かって落ちていた。
フェイト「な・・・なにが・・・？」
わたしが意識を保ってたのはそこまで、最後に見たのは二丁の銃のデバイスを構えるお面の子と私に向かってくるアルフの泣き顔だった。

なのは視点

なのは「あの子・・・強い！」
私、高町なのははジュエルシードを探しに森へ入った。
でもそこには大きくなった猫さんと金色の綺麗な髪をもった女の子がいた。
彼女はジュエルシードが目的で来たみたい。話をしようとしたら、できなくて攻撃されたの。
そこから今、向こうの方が強くて押されてる・・
なのは「くう・・！レイジングハート！」
レイハ『ディバインバスター！』
なのは「シュート！」
私の出来る攻撃を打つ！でも、簡単に避けられちゃった・・！

フェイト「プラズマランサー！」

バルディッシュ『Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ！』

フェイト「ファイア！」

黄色い魔力弾が襲ってきた！

なのは「くっ・・！」

急いでシールドを張る、そして上に離脱・・・しようとしたら

なのは「え？・・・・な、なにが・・・？」

いきなり光に包まれて、地面に落下していた。

なのは「う・・・」

見ると向こうの子も落とされてた。意識を失う寸前、私はユーノくんに会った時みたお面の子を見た。

桜花視点

桜花「ふっ・・この攻撃さ、結構威力低い割に必ず当たるから鬼畜だよね」

イカロス『いや、マスター。光速で放たれる攻撃を防ぐはまだしも避けるなんて出来ませんよ普通』

桜花「え？俺出来るけど？」

イカロス『それはマスターが異常なだけです。』

桜花「さて、あの二人の視点の内にジュエルシードも回収したことだし。なのは連れて帰るよ！」

イカロス『え？あの子の怪我はどうす・・ああ、能力がありましたね・・』

桜花「そのとおり！あらゆる怪我を治す程度の能力を創造！」

桜花「あ、いたいた。なのは！・・・ユーノ、今から見たことは内緒な？」

ポゥ・・・キューーーン・・

桜花「よし、治った・・・」

ユーノ「・・・（そんな・・なんだ！今の力は！？）」

桜花「よいしょっと、結構軽いなこいつ。」

なのは「う・・ううん・・」

桜花「じゃあ、帰るぞ。ユーノ」

その後背中のなのはを見て、アリサとすずかに迫られたのは別の話。

桜花「フェイトはどうなったかな？」

イカロス『大丈夫でしょう。マスターあの攻撃３：７で威力配分してましたし。』

桜花「いや、母親にあんな折檻されてるの知ってたら手加減もするでしょ？」

イカロス『いいかげん、なのはのほうが可愛そうになってきた・・』

桜花君のなのはの初戦闘介入（後書き）

終わります。
そろそろプレシアと会うかな？

桜花君が温泉旅行に来たよ！（前書き）

けいおん！の休止からすこしだけプロローグを編集しました！

桜花君が温泉旅行に来たよ！

どうも！いつも元気な桜花君です！
え～前回、なのはとフェイトの両名を吹き飛ばした俺ですが。あの日から数日たちまして。
今は、なのは達と鳴海温泉に旅行に来ています。親のいない俺がどうやって来たか？福引で当てたのだよ！幸運能力作って！
イカサマ？ははは違うな、これは頭脳プレーと言って欲しいね！

桜花「でだ、なのはよ。」

なのは「なに？桜花君？」

桜花「君のその首飾りはなんだね？いつも付けているが？」

はい、レイジングハートの事です。あえて意味も無く突っ込んでみたり！

なのは「いや、これはその・・そう！昔買ってもらったの！」

桜花「へーそーなのかー」

アリサ「ほら、なのはもアンタも置いてくわよ！早くしなさい！」

桜花「まあ、落ち着けよアリサ。だからツンデレと言われるのだ。」

アリサ「私はツンデレじゃない！！」

桜花「アリサ、ツンデレは決まってそういうんだ・・諦めろ」

アリサ「むぐぐぐぐぐ・・！！」

すずか「まあまあ、アリサちゃんほら遅れちゃうよ？」

桜花「行くか、魔王よ」

なのは「うん！」

なのは「ってさりげなく魔王ってよんだでしょ！！なのはだよ！！！」

桜花「え？君何言ってんの？」

なのは「むがあああああ！！」

・

・

・

フェイト視点

今、私はジュエルシードの反応を追って温泉旅館に来てる。でも昼間に封印するのは危ないし人に見られるかもしれないから。今は待機状態。アルフも温泉を楽しんでるみたい。

フェイト「私は、このまま待ってようかな。」

フェイト「ん？・・誰か来る？」

桜花「おー・・私の嫁はっけーん！」

そこにいたのは、この前私を抱きしめてきた男の子だった。

桜花「どしたの？・・あ、ジュエルシードか。そういえばここらへんにも置いたな確か。」

フェイト「・・・貴方の目的は、なんなんですか？私たちに回収させて・・いったい何を・・」

桜花「ん～？いや特に目的はないんだよ。ジュエルシードだって君らが集め始める前に全部集めただけだし。正直・・いらないし？」

フェイト「なら、なんでこんなことを？」

桜花「いらない、うんジュエルシードはいらないよ？でもさ、どーせなら面白いほうがいいじゃないか。丁度集めてる役者もいるんだし。だったらばらまいて競争させた方が面白いもん。」

わたしは、その考えを聞いて少し腹が立った。母さんのために動いてる私や、何か事情があって動いてる向こうの子の気持ちを、ただ面白がるために利用してるこの子は、少し許せない。

フェイト「っ！なんで・・君はどうしてそんなふうに考えられるの！？君は私のジュエルシードを集める理由を知ってるらしいけど、どうしてそんなふうに動けるの！？ただ面白いからだなんて・・ひどいよ！！」

桜花「・・・はあ・・」

桜花「知るかい、そんなもん。お前の理由とかは俺には関係ないだろう？母親の為？結構じゃないか、でもな俺がその理由を知ったからって、お前にジュエルシードを渡さないといけない理由にはならないだろう？」

フェイト「それはっ・・そうだけど・・・」

桜花「いいかフェイト。俺は、面白いことが好きだ。悲劇だろうと喜劇だろうとなんだろうと面白いものが好きだ。だから俺は、皆が笑っている物語が好きなんだよ。」

フェイト「それは・・ハッピーエンドとかしか嫌ってこと？」

桜花「その通りだ！俺はなんだろうと最終的には皆が笑ってて幸せなラストを迎えることしか認めない！」

フェイト「じゃあ、このジュエルシードの事も？」

桜花「おう、最後の最後にはお前もなのはもお前の母親もお前の使い魔も全員幸せにしてやるよ！」

彼の言葉を聞いた後、私は驚いた、そしてすこし安心した。面白い

ものが好き、その思想の裏には皆を幸せにしたいという想いがつまっていたから。

フェイト「そう・・・そうなんだ。じゃあ、もういいよ・・」

桜花「そう？ん～というかお前、結構顔色悪いな・・おいちょっとこっち来い。」

彼が私を呼ぶ、そんなに顔色悪いかな？そうおもいながら彼のもとへ近づく。

桜花「ふむふむ・・・あ～あ～あ～・・ダメだこりゃ。お前まともに食事とってないだろ？それに睡眠も足りてない。」

う、的確に指摘してきたよ・・

フェイト「いやでも・・ちゃんと栄養食品は食べてるし、2、3時間は毎日寝てるよ？」

桜花「黙れ、お前はナポレオンか。いいから俺に任せろ。」

彼は私の頭に手を乗せ、1，2秒後には手を離した。すると私の体のだるさや疲れ、折檻による痣や傷・・あとこの前のお面の子に受けた傷がなかったことのように消えた。どうして！？なんでこんな・・

桜花「『大嘘憑き（オールフィクション）』全てを虚構にしてしまう最凶のスキルだよ。」

フェイト「おーる・・ふぃくしょん・・？」

レアスキルだろうか？

桜花「つまり、今のはフェイトの体の疲れや傷を”無かったことにした”って訳だ」

そんな因果を捻じ曲げるような力が・・！？・・・ううん、彼は私を治してくれたんだ、気にしちゃダメだよね。

フェイト「えと・・ありがとう・・・あ～と・・・？」

桜花「おおっと、俺の名前まだ教えてなかったな。俺は風華桜花。桜花君と呼びたまえ。」

フェイト「桜花だね。私はフェイト・テスタロッサ。よろしくね」

桜花「見事なスルーだなおい・・。んじゃあ。そろそろ行くわ、せいぜい頑張れよ。・・・あ、あと俺の事はなのはや管理局とか会ったら言わないでくれ。今の力の事もね。」

フェイト「うん、分かった。またね、桜花。」

彼との二度目の出会いは私にとって有意義な時間になった。

桜花君が温泉旅行に来たよ！（後書き）

はい出ました大嘘憑き！はい定番のチート能力ですねぇ。
でも後々制限するとかしないからね！！
でもやっぱり文才が欲しい・・

桜花君が温泉旅行に来たよ！２（前書き）

温泉編終わりです。

桜花君が温泉旅行に来たよ！2

どうも、前回フェイトさんにすこーしだけちょっかい掛けた桜花君です。
今はあの後、なのはたちと合流し温泉に入ってます。

桜花「はふ～・・・電気風呂に入りながら2，3時間足元でずっとマッサージしてもらって、そのうえコーヒー牛乳をあおってる感じに気持ちいいなあ」

恭也「どんなたとえ方なんだ・・」

士郎「ははは・・語彙力豊かな子なんだね・・さて、君に少し話があるんだけどいいかな？桜花君？」

桜花「・・・なんですかね？え～と恭也さん？士郎さん？どっち？」

士郎「ああ、僕は高町士郎。なのはの父親だよ」

桜花「ですか。んじゃ恭也さんは向こうの女風呂にでも行ってて下さい。」

恭也「なんでだ！！？」

桜花「士郎さんが俺に話があるようなので、恭也さんには席を・・いや場所をはずしてもらおうかと。」

恭也「俺には、席も場所すらもくれないのか！！？」

桜花「冗談くらいは普通に流しましょうよ、なにカリカリしてるんですか」

恭也「むぐ・・だが俺もここに居させてもらうからな！」

桜花「いいですよ。・・それで、話ってのは十中八九なのはの事だと思いますが・・なんでしょうか？」

士郎「いやね、なのはが最近君の事ばかり話すもんだから気になってね」

桜花「へ～・・あのなのはが俺の事を・・周りに男子がいないんじゃないんですか？」

士郎「ん？どういうことだい？」

桜花「だから、周りに男子がいないところに俺がたまたま来たって話ですよ。珍しいんじゃないですかね？」

桜花「ま、このままいけばアイツ絶対男の噂も無いまま行きおくれになりますよ？」

士郎「な、なに！？君！なのはに限ってそんなことは！」

桜花「言えるのか！ただでさえなのはには男の噂もなく、珍しく周りに現れた俺にもこうやって父兄が詰め寄ってくるんだぜ？どうだよその辺？」

士郎「た、確かに！？そうか・・そうしたらなのはの未来は！？」

桜花「ああ・・・確実に未婚者のまま・・・人生を終えるだろう・・・」

恭也「あああああ！！？なのはあああああ！！？」

士郎「だめな父親を許してくれ！！」

桜花「やっぱおもしろいなこの家族」

そうして俺は先に風呂を出た。

・

・

・

なのは視点

今、私はアリサちゃんとすずかちゃんと一緒にお風呂を上がって部屋に向かう途中にオレンジ色の髪のお姉さんに絡まれてます。

なのは「えと・・・なんですか？」

アルフ「ふ～ん・・《良く聞きな。いいかい？これ以上フェイトの邪魔をするなら・・がぶっと行くからね》」

なのは「！？」

アルフ「あはは、見間違いみたい。ごめんねお嬢ちゃん達、じゃあね～」

そういって、お姉さんは行っちゃいました。

なのは「《ユーノくん・・今のって・・》」

ユーノ「《うん、おそらくあの黒い魔導師の仲間だろうね・・》」

アリサ「なにあれ！なんなのよ！あの酔っ払い！むかつく！！」

すずか「アリサちゃん、落ち着いて・・！」

なのは「あはは・・」

・

・

・

桜花視点

桜花「ふむ・・アルフがなのはに絡んでんな・・あ、こっち来た。」

アルフ「・・あ、あんたは！」

桜花「おいっすアルフ。お久しぶり！我が嫁は元気か？」

アルフ「フェイトはアンタの嫁じゃない！それにアンタに教える義

理も無いね！」

桜花「ま、さっき会ってきたんだけどね！」

アルフ「なっ・・あんたフェイトに何かしてないだろうね・・」

桜花「ふっ・・まあ、それは自分の目で確かめるんだな・・ほら速く言った方がいいんじゃないか？」にやり

アルフ「っ！！？フェイト！！」ダッ

桜花「・・・ふふふ」

イカロス『さすがに酷いんじゃないですか？』

桜花「いやいや・・だっていままでの５つの世界全部性格を変えて活躍してたんだぜ？たまには素を出したいよ」

イカロス『そうですか。ならいいです。』

・

・

・

はい、時間が飛んで夜になりました。卓球とか、混乱した恭也さんたちがなのはに詰め寄る様はとても面白かったです。

桜花「さて・・ジュエルシードをフェイトが封印したぞ、そんでな

のはも飛んできたぞっと」

イカロス『マスター、これからどうするんですか？また打ち落とすんですか？』

桜花「いやイカロスお前・・それは鬼畜すぎんだろ」

イカロス『では、どうするので？』

桜花「ん～・・そうだね・・どうしようか？」

イカロス『私に聞かないでください。』

桜花「んじゃ、あれだ。なのはが負けるはずだから・・・よし介入しよう、そうしよう」

イカロス『その後は？』

桜花「ん～、一旦去ってなのはを迎えに来た設定でなのはに近づこう」

イカロス『了解です。とりあえずＳｅｔ　ｕｐ』

桜花「またいきなりですね。イカロスさん・・」

・　　・　　・

三者視点

現在、なのはとフェイトは戦闘を行っている。
ジュエルシードを先に封印したフェイトのもとへなのはやってきたからだ。なのはの援護をしようとしたユーノもアルフと戦闘を行っている。

フェイト「くっ・・」

なのは「レイジングハート！」

レイハ『ディバインバスター！』

なのは「ディバイン！バスター！！！」

どおおおおおん！！

なのはのディバインバスターがフェイトに向かうしかし

フェイト「はあ！！」

フェイトはシールドを張りそれを防ぐ。

なのは「どうしてこんなことしてるの！？おはなし聞かせて！」

フェイト「話しあうだけじゃ・・なにも変わらない！」

バル『プラズマランサー！』

フェイト「ファイア！！」

また、フェイトの魔力弾がなのはに向かう

なのは「きゃあ！」

レイハ『マスター！』

そのときレイジングハートがとっさになのはの足に羽根をはなしスピードをあげその場をかわす。

なのは「あ、ありがとう。レイジングハート」

レイハ『いえいえ、マスター来ます！』

話している隙にフェイトがバルディッシュを鎌の形に変えて迫ってくる。

なのは「うん！レイジングハート！もう一回、ディバインバスター！」

レイハ『ディバインバスター！』

なのは「シュート！！」

なのはの砲撃がフェイトに向かい、当たる。

なのは「・・やったかな？」

なのはが警戒を解こうとしたその時

レイハ『マスター！』

砲撃をかわしたフェイトが上から迫ってきた。

なのは「あっ！きゃあ！」

フェイトの鎌がなのはの首にあてられる。

ユーノ「なのは！」

ユーノがなのはを心配してアルフから目を離す。すると

アルフ「よそ見してる場合かい！」バキイイ！

ユーノ「はっ！？うわあああ！！」ドシャ！

レイハ『ｐｕｌｌ　ｏｕｔ』

と負けを認めたレイジングハートがジュエルシードを一つ出す。

なのは「レイジングハート！？」

フェイト「主人の想いのいい子なんだね・・」

とフェイトがそれを取ろうとした時――

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド！！！！！

！！！！！！！！！！

二人の上から、無数の魔力弾が降り注いできた――――

フェイト「！？きゃあああ！！」

なのは「きゃあああああ！！」

その不意打ちに二人は避けられず地面に落ちる。そして何とか耐えた二人は上を見る。そこには。

桜花「ははははは！ジュエルシードはいただいたァ！！」

最狂無敵の転生者が嘲笑うようにジュエルシードを手にしていた。

フェイト「君は！？」

なのは「あの時のお面の子！？なんでこんなところに！？」

桜花「お面？ああ、これの事か・・悪いなァ・・さっきまでの戦い、ちゃんと見てたぜ！」

桜花「まあ、こんな簡単にジュエルシードを手に入れられるとは思わなかったけどね！！」

なのは「それは、今の真剣勝負に勝ったフェイトちゃんの物だよ！返して！！」

桜花「はあ？返すわけないだろう・・でなきゃとったりしないし？」

なのは「くう・・！！？」

フェイト「！！？」

――――ヴン！！

そんな音と共に蒼黒い色のバインドが二人を捉える。

なのは「なあ！！？バインド！？むぐぐ・・・！！」

フェイト「はああ！！・・ぐっ！」

フェイトとなのはは必死にバインドを解こうとするが強力すぎるバインドだから全然解けない。みるとアルフやユーノも捕まっている。

桜花「んじゃあ、これで俺はいくわ。そのバインドも少ししたら解けるから。じゃね～」

と言い残して桜花は飛んで行った。

・

・

・

なのは視点

桜花「んじゃあ、これで俺はいくわ。そのバインドも少ししたら解けるから。じゃね～」

そういってお面の子はどこかへ行ってしまった。
私はとても悔しかった。黒い魔導師の子に負けて、さらにジュエルシードまで奪われちゃった。
私はとても弱かった。その事実がとても悔しくてならない。

なのは「・・・」

フェイト「ぐっ・・・んんん！！」ぐぐぐ

隣では黒い魔導師の子がバインドを解こうとしてる。
だから私は話しかけてみた。

なのは「ねえ、きみの名前はなんていうの？」

フェイト「っ！？・・私は・・フェイト・テスタロッサ・・」

なのは「私は、高町なのは・・よろしくねフェイトちゃん。」

フェイト「え？・・えと・・・うん・・」パキィ！

そうしてるとフェイトちゃんのバインドが解けた。私のはまだ解けない。

フェイト「・・・それじゃ・・」

フェイトちゃんはオレンジ色のお姉さんのバインドを切り裂いて去っていく

なのは「待って！」

フェイト「もう私の前に現れないで。次来たら・・手加減できない・・」

そう言ってフェイトちゃんは去って行った。

そしてさっきまでの悔しさがこみ上げて来て、泣きそうになった。

そんなところに・・・

桜花「おーいたいた・・なに泣いてんだ？なのはよ。」

いつも私をからかう桜花くんがやってきた。

なのは「おう・・・か・・君・・！？」

桜花君が温泉旅行に来たよ！２（後書き）

バインドで捕まり、さらにバリアジャケットにレイジングハートまで持ってるなのはの元へ現れた桜花君！さあ、どうなる！！

桜花君が温泉旅行に来たよ！３（前書き）

温泉編終わり！

桜花君が温泉旅行に来たよ！3

どうも、前回見事な悪役っぷりをみせた桜花君です。
そんでなのは達の前から去った俺は今、元の姿になり何食わぬ顔でなのはの元へ！

桜花「おーいたいた・・なに泣いてんだ？なのはよ。」

なのは「おう・・・か・・君・・！？」

おーびっくりしてる。どれ追撃！

桜花「なのは・・その服はなんだ？コスプレか？杖まで持って・・ん？オマエの周りのその光ってんのは・・」

なのは「え！？いや、あの・・これはその・・」

俺が指摘したのはバリアジャケットにバインドの事だ。
ちなみに普段は魔力を抑えてるから俺は魔導師とばれないのだ

桜花「ふむむ・・・あれ？魔法的な奴か？お前魔法使いなの？」

さらなる追撃。

なのは「え！？あわわわわ・・・」

桜花「ま、そんなことはどーでもいいんですけどね！それより早く帰ろうぜ・・俺は眠いんだ！」

なのは「え・・？あ！うん！」

と、なのはと帰ろうとするが、だがしかし！なのははバインドに捕まっていて動けない！

なのは「・・・桜花くん・・これのせいで動けないん・・・だけど・・」

桜花「ん？なのはよ・・それはなんだ？拘束術の類か？」

なのは「う・・うんそんなところ・・」

桜花「ふ～ん・・」

俺は、なのはに近づきバインドに触れる。

まあ、俺のバインドだし解けないことはあり得ない！

桜花「えい」

パキィン！

バインドが音を立てて壊れる。

なのは「えええ！？なんで！？」

桜花「なんだ・・結構脆いじゃないか・・ホラ行こうぜ！」

なのは「う、うん・・」

そうして俺となのはは旅館に戻った。

フェイト視点

今私はあのお面の人に襲撃されてジュエルシードを取られてから、アルフと家に戻っている。

アルフ「フェイト・・またご飯食べてないね！ちゃんと食べなきゃだめだよ！」

フェイト「大丈夫・・少しだけど、ちゃんと食べたから・・」

そう言ってアルフをなだめる。

明日は、母さんの元へ中間報告しに行く予定だし、早く寝ないと・・・

フェイト「おやすみ・・アルフ」

アルフ「う・・うん・・おやすみフェイト・・」

アルフ視点

私の主人、フェイトが寝た後私はベランダに出た。

アルフ「フェイト・・・」

フェイトの身を心配していた時――

桜花「おー？なにたそがれてんだ？アルフ？」

あの時、フェイトに抱きついてきたあの男がやってきた。

アルフ「あ！お前！！あの時フェイトのとこに全力で言ったけどフェイトなんにもなって無かったよ！騙したな！！」

桜花「あ、あの時のか？ごめん忘れたわ。」

アルフ「このっ！・・・まあいい、それで何しに来たんだい！」

目的がこいつの場合はっきりしない・・何しにきたんだ・・

桜花「いやね・・そろそろ大幅な介入をしてやろうとね！」

アルフ「どういうことだい・・？」

桜花「つまり、フェイトとその母親、プレシアの仲を直す。」

アルフ「！？そんなの・・！どうやって・・」

桜花「簡単だ、フェイトの集めてるジュエルシードの使用目的を先に叶えちまえばいいんだよ。」

アルフ「え？」

桜花「ジュエルシード集めてるってことはそれを使用する目的があるわけだろ？なら先にそいつを叶えちまって～そのあとはもうやりたい放題出来んじゃん？」

アルフ「え・・そういえば・・そうなるね・・」

桜花「だから、俺も明日プレシアんとこに行くわ。」

え・・？こいつ何言ってんの？

アルフ「何言ってんだい！！そんなことできるわけないじゃん！！！」

桜花「俺に出来ないことは・・・うん、ほとんどないぜ！」

アルフ「・・・もういいよ、勝手にしな！」

もう、投げやりになった。

桜花「んじゃ、旅館に戻るわ。明日の昼辺りにはこっち戻るからそしたらお邪魔するわ」

アルフ「はいはい・・もうどうにでもなれ・・」

桜花視点

そんで旅館に戻ってきた私桜花君です。

現在、日が明けて朝。帰る準備をしています。

士郎「なのは達は帰る準備できたかい？」

なのは「うん！できたよ！」

アリサ「はい、大丈夫です！」

すずか「だいじょうぶです。」

桜花「アリサって・・敬語できたんだ・・あ、おれも完了です。」

アリサ「私だって礼儀くらいはわきまえてるわよ！！」

士郎「それじゃあ、行こうか。」

その後チェックアウトをとり。車に乗って鳴海市へＧＯ！！

・・・移動中・・・

はい到着！２日ぶりの我が家です。

桜花「ありがとうございました。士郎さん」

士郎「いやいや、それじゃあね。桜花君」

なのは「ばいばーい！」

桜花「おう、じゃあね」

さて・・行きますか！時の庭園！！

桜花「イカロス」

イカロス『はい、というか出番が遅いです。』

桜花「気にするな。んじゃ転移よろしく。」

イカロス『・・了解、転移。』

次の瞬間、俺は時の庭園に来ていた。

桜花「お～ここが・・・」

・・・ああ！！・・・ぐう！！・・・ぐあっ！！・・・

桜花「なんか向こうの方からバチィ！バチィ！って音と悲鳴が聞こえるよ？」

イカロス『はい・・原作通り折檻されてるんでしょう・・』

桜花「止めに行こう、そうしよう。」

・

・

・

プレシア視点

あの子、フェイトが持ってきたジュエルシードはたったの3個・・

正直失望したわ。

だから今、折檻している。今目の前でフェイトはボロボロになって

倒れている。

プレシア「・・次はちゃんと集めてきなさい・・ジュエルシードを！」

フェイト「・・はい・・母さん・・っ・・」

そして奥の部屋へ戻ろうとした時。

桜花「うわー家庭内暴力だ！幼女虐待だーー！！ってことで俺の嫁傷つけた罪は重いぞコラ！デコピン１０発の刑だ！！」

どこの誰だか知らない子供が、そんな言葉と一緒に入ってきた。

桜花君が温泉旅行に来たよ！３（後書き）

ちなみにフェイトは天然：Ａ＋なんで桜花君とお面の人は別人と考えてます。

桜花君とプレシアそんでアリシア（前書き）

今回は、原作ブレイクしました。

桜花君とプレシアそんでアリシア

はいどうも、毎度おなじみ桜花君です。
前回、温泉旅行の中でしっちゃかめっちゃかかきまわした揚句、プレシアん家に乗り込みました。
現在、フェイトちゃんが目の前でぼろ雑巾のようになってて少し怒ってます！

プレシア「・・それで、貴方はだれなのかしら・・それにデコピン１０発って・・」

桜花「そうだ！私の可愛いフェイトちゃんの体にこんな傷をいっぱい作りくさってなめた真似しくさるのう！覚悟はええんか！おお！！！」

プレシア「な、なんなのよ・・別に私の所有物なんだから何しようと勝手じゃない・・！」

桜花「ん？・・それもそうか・・？まいっか、どうせ元通りに戻せるし。」

俺はフェイトに近づき大嘘憑きを発動させる。
ん？プレシアの顔が固まってる。どうしたんだろう？

桜花「どうした？プレシアよ？」

プレシア「今、何をしたの・・？魔力も感じなかったし・・」

桜花「これか？これは俺の・・レアスキル？の大嘘憑き（オールフィクション）。死ですら

虚構に出来るスキルだよ！」

プレシア「！？・・死んだことも虚構に出来るですって？」

イカロス『（マスター・・大丈夫ですか？そんなこと言って・・）』

桜花「（大丈夫だ。悪用されないようこう言っとくから。）まあ・・一人につき一回までだけどね？」

プレシア「どういうコト？」

桜花「例えば、アンタが死んでそれを無かったことにして生き返らせるとしよう。そしたら、もうアンタはこのスキルじゃ生き返らせられないってことだ。逆を言えば一回までなら誰であろうと、人間じゃなかろうと生き返らせられる。」

プレシア「それは本当？なら・・」

桜花「んじゃ、俺は帰るわ。」

プレシア「待って！貴方に・・頼みたいことがあるの・・！」

桜花「え～・・何？」

まあ、十中八九アリシアの蘇生だろうけどね！

プレシア「娘を・・生き返らせてほしいの・・！！！」

桜花「・・ジュエルシードもその手段か？フェイトも・・」

プレシア「ええ・・そのためにアリシアのクローンであるフェイトを作ったのよ・・でも！フェイトはアリシアにはなれなかった！だから、フェイトは私が慰めに作ったお人形・・ただの人形なのよ！」

桜花「へー、そーなのかー。」

ルー〇アの真似をしてみる。結構便利だぞこれ。

プレシア「・・で・・どうかしら・・？」

桜花「率直に言おう。お前がその考えを捨てるならええよ！」

プレシア「？その考えとは・・？」

桜花「フェイトを人形扱いするのはやめろ。ちゃんと娘として愛せ。」

プレシア「・・・どういうコト・・？」

桜花「はあ・・いいか？あんたがどうであれアイツはアンタの娘だ。アリシアじゃなくフェイトって言うアンタの娘だ。逆にアイツにとっての母親は世界で唯一アンタ一人だけなんだよ！過程はどうあれ生み出したのはアンタだ！！それに・・アリシアをこのまま生き返らせたら・・アリシアは絶対悲しみに包まれるぞ？いいのか？理由は・・言わなくても分かるだろう？」

プレシア「・・・ええ・・分かるわ・・私も・・フェイトを娘として認める事でアリシアを失くした事実を受け入れたことになる気がして・・そのことから目を必死にそむけてたから・・・・でも、もう逃げない。」

桜花「そうか、んじゃ・・」

プレシア「ええ、フェイトも私の娘・・愛すべきもう一人の娘として・・向き合っていくわ。許してくれるか・・分からないけどね？」

そういってプレシアは悲しそうな、不安げな笑みを浮かべた。

桜花「だーいじょーぶ！私のフェイトちゃんは天然で人見知りでなによりマザコンが入ってるから！」

プレシア「・・そういえば最初から私のフェイトと言ってるけど・・どういう関係？」

桜花「ん～・・俺が座ってる時に俺の膝の上に座るくらいの関係？」

そういうと、後ろから後頭部を蹴られた。

桜花「ぶぎゃあ！！！な、なんだ！？」

アルフ「あれはアンタがフェイトを座らせたんだろうが！！」

桜花「あ、アルフ！？まて、話しを――」

アルフ「この！この！！このおおお！！フェイトは渡さない！！！」

桜花「ぐぎゃ！ぐげっ！ぎゃあああ！！！」

プレシア「・・あの・・そろそろ良いかしら？」

桜花「お・・・おう・・・じゃあ・・アリシア・・蘇生しようか・・・・」ずりずり・・

・

・

・

プレシア視点

最初は、訳が分からない男の子・・でも今は、フェイトと向き合わせるきっかけをくれた人・・
その恩人は今・・

桜花「さて、んじゃアリシアを生き返らせようか！」

プレシア「さっきまでぼろぼろだったのに・・」

桜花「俺の大嘘憑きは怪我ならいくらでも直せるんだよ。」

プレシア「管理局の医療班に見せたら泣くわね。」

桜花「まあ、俺のレアスキル？はこれだけじゃないからな～・・多分、管理局程度なら片手間で潰せるぞ？」

プレシア「・・・大嘘憑き？だったわね・・それの時も思ったけど・・規格外すぎない？あとどのくらいあるのよ・・」

桜花「え～と・・大嘘憑きと同じカテゴリに分類されるのは・・１

京２８５８兆５１９億６７６３万３８６５個くらいかな？この他にもいろいろあるけどね♪」

プレシア「・・・もう、なにも言わないわ・・」

桜花「んじゃ、行くよ！」

あら、気がつけばアリシアの目の前に来てたみたい・・

桜花「まずは・・培養機からだしてっと・・わお素っ裸だ♪」

プレシア「あ！こ、これを着せて！！」

と私は焦ってそこにあったコートを渡す。

桜花「ん？うん、分かった。」

彼は、アリシアにそれを着せた。

桜花『んじゃ、行こっか♪Ｉｔ，ａｌｌ　ｆｉｃｔｉｏｎ！』

彼が、口調を変えてそう言った。なにか気持ち悪いものを見た気がするけど、すぐに引っ込んだ。

桜花「ん、オッケーかな？おーい、アリシアちゃん？起きてー」ぺちぺち

アリシア「・・・」

プレシア「・・・ちゃんと生きてるわよね？」

内心、ドキドキしながら見る。

桜花「ん？うん。一応息はしてるし、脈もある。生き返りは成功だよ？さて、起きて―・・おーい？」

アリシア「う・・ううん・・なにー・・？」むくっ

アリシアが起きた・・私はその瞬間涙を抑えられず、泣きながら抱きついた。

プレシア「アリシア！よかった・・本当によかった・・」

アリシア「え？ど、どうしたのおかあさん・・？」

プレシア「いえ・・ちょっと・・嬉しくてね・・・」

桜花「・・・」じー

アリシア「あっ・・・」

桜花「・・・（アリシアが俺に気付いた・・プレシアは抱きついてるから背後の俺に気づいてない・・どうする？空気だぞ？俺・・）」

アリシアと桜花は向き合って、視線を合わせ見つめあっている

アリシア「・・・」

桜花「・・・（念話しよう・・アリシアには・・うん魔力はあるな。んん！おーい聞こえるかい？）」

アリシア「・・・・!?（え!?な、なに!?頭の中に・・）」

桜花「（うん、今目の前に居る俺が頭に直接話しかけてるから、頭で考えれば会話できるよ。）」

アリシア「（・・えと・・今・・おかあさんがだきついてきてるのって・・?）」

桜花「（うん・・アリシアちゃん自分が死んでたのって・・分かる?）」

アリシア「（・・うん・・わかるよ・・）」

桜花「（そう・・じゃあ、説明するねまずは今この状況から―――）」

・・・・説明中・・・・

桜花「（って訳。分かったかな?）」

アリシア「（うん!・・ありがとう、お兄ちゃん!）」

桜花「（・・・超幸せ・・っと・・ま、今はお母さんと話しをして妹に会うといいよ。じゃあ、俺は帰るね!また来るよ!）」

アリシア「（うん!またね!!!）」にこー

・　・　・

桜花視点

いやーアリシアちゃんの笑顔はいいね～・・癒されるわ―・・

桜花「さて・・これからどうしようか？とりあえず家に戻ってきた訳だけど・・」

イカロス『次は、暴走事件でしたよね？』

桜花「うん・・あ、明日だよ！」

イカロス『でも・・プレシアの目的は達成したから・・もうフェイトは来ないんじゃ・・』

桜花「ん～ん！大丈夫！一応、これと同じ手紙を置いといたから。」

―――――

プレシアへ・・

あ。そういえば自己紹介してなかったね！

俺の名前は風華　桜花！９歳です！んでアリシア蘇生してなんだけど、頼みがある。

ジュエルシード集めを続けてほしいんだ。
理由は、お前達テスタロッサ家が犯罪者として管理局に捕まらないようにするため。
幸い、向こうの対応が遅いこともあるからそこを利用させてもらう。
こっちは被害が出ないよう善意で集めてたんです～って言い張るぜ！
んじゃ、そこんとこよろしく。フェイトとアリシア・・あとアルフにもよろしく言っといてくれ！じゃね！！

――――――

桜花「どうよ？」
イカロス『マスター・・結構手回し良いですね・・』
桜花「いや・・だてに６００年近く生きてないからね・・」遠い目
イカロス『マスター・・』
桜花「んじゃ・・今日はもう遅いし・・寝ようか！」
イカロス『・・・スリープモード・・・』
桜花「・・・俺より先に寝ちゃうってどう思う？読者達・・」ぐすっ

桜花君とプレシアそんでアリシア（後書き）

戦闘ないと結構楽だわ―・・・

ま、でもＫＹはフルボッコですけどね！！！

次回は暴走事件です！

桜花君と暴走事件その後フェイトとお風呂！（前書き）

今回は、なのはとの活動を開始しフェイトとお風呂にも入ります。

桜花君と暴走事件その後フェイトとお風呂！

どうも、桜花君です。前回、フェイトについてって時の庭園へ乗り込みプレシアの目的をブチ壊してやりました！
しかーし・・個人的には原作の原型くらいは残したいのだよ・・・で！フェイトにジュエルシード集めを続けさせました。

桜花「・・・どうも、フェイトは俺の事はお面の俺と別人に考えてるみたいだね・・」

イカロス『え！？そうなんですか？天然すぎますね・・でもなんで分かったんですか？』

桜花「ん？俺の1京のスキルのうちの一つ、『掌握（グリップアウト）』を使ったんだよ。」

イカロス『ふむ・・・効果はどのような・・？』

桜花「ん～・・自分の置かれてる状況や周りの状況、周囲の人の自分に対する評価や認識の確認が出来るんだよ。」

イカロス『ああ、それでフェイトさんのマスターに対する認識がお面ｖｅｒと違ったと。』

桜花「そ。んじゃ今日は・・ＫＹフルボッコだぜえぇえええええええ！！！！」

イカロス『ひゃっはあああああああ！！』

桜花「ノリがいいな！？イカロス！？」

イカロス『こうでもしないとマスターにはついてけませんよ。』

桜花「・・・そっか・・」

フェイト視点

今私は母さんの所から戻ってきてジュエルシード集めを再開している。

・・・でも母さん、私が帰る時暖かく送り出してくれたけど・・何かあったのかな？

アルフに聞いても何も知らない見たいだったし・・・いつの間にか折檻の傷も無いし・・

でも、今は母さんのためにジュエルシードを一刻も早く集めないと・・！！

フェイト「・・・行くよ！アルフ・・！」

アルフ「う、うん・・でもフェイト！危険だよ！」

今私たちがやろうとしてるのは、ジュエルシードを強制発動させて封印すること。

アルフが言うように今の私の魔力量じゃ結構危ない・・でも、やるしかないんだ！

フェイト「大丈夫、アルフがいるし・・私は強いから・・」

アルフ「・・・分かった・・でも危ないと思ったら止めるからね！」

フェイト「うん・・行くよ！・・アルタス、クルタス。エイギアス・・・！」

魔法陣が広がり魔力がためられていく・・・

・

・

・

桜花視点

桜花「来た！強制発動！」

なのは「え！？」

ユーノ「そんな！？なにをしてるんだ！くそ、広域結界！間に合え・・！！」

今、俺はなのはの元へ来てジュエルシードを集める事を聞きだし、手伝うところまでこぎつけた。

まあ、そこんところは割愛。力についてはプレシアと同じ感じに説明した。

桜花「行こう！なのは！ユーノ！」

なのは「うん！！」

フェイトのもとへ俺達は向かう。

・

・

・

三者視点

フェイト「はあっ！・・はあっ！・・はあっ！・・・・」

アルフ「・・フェイト・・大丈夫かい？」

フェイト「はあ・・はあ・・ふう・・うん、大分落ち着いたから・・大丈夫。でも向こうも近くに居るみたいだ・・」

そしてフェイトとアルフはジュエルシードに向かって飛んでいく。

一方なのは達も近づいてきていた。そして同時に封印を施す。

なのは「リリカル！マジカル！」

フェイト「ジュエルシード！」

なのは「封！」

フェイト「印！」

バルディッシュとレイジングハートがぶつかり大きな魔力がぶつかる、その影響で両方にヒビが入りなのはとフェイトが吹き飛び小規模な次元震が起こる。それが示すのは――――”暴走”

フェイト「っ！！？」

なのは「きゃあ！！？」

ユーノ「ジュエルシードが暴走している・・！？」

桜花「っ・・・！！？アイツ！？」

桜花が見た先そこにはフェイトがジュエルシードを掴み魔力を抑えようとしているところだった。

桜花「ちっ・・！！」

ユーノ「桜花！？」

桜花が走り出す。

・

・

・

フェイト視点

止まれ・・止まれ・・・

フェイト「くっ・・止まれ・・！！」ぐぐ・・

ジュエルシードの暴走・・予想外の出来ごとだけど・・でも！母さんの為に・・！！

フェイト「くっ・・止まれ！！！」

桜花「何やってんだよ・・お前は・・」

そこに、あの時私を抱きしめて嵐のように去って行ったあの男の子――桜花がいた。

フェイト「・・桜花・・！！」

桜花「全く・・・ホラ貸してみろ・・ほいっと！！」

桜花は私の手をどかしジュエルシードをつかみ取る。

そして次の瞬間には、暴走は止まりジュエルシードが桜花の手に握られていた。

フェイト「え・・？どうやって・・？」

桜花「うん？いや・・前に教えたスキル・・覚えてない？」

フェイト「あ・・大嘘憑き・・だっけ・・？」

桜花は以前のスキルを使って暴走を無かったことにしたみたい・・

それにしても規格外だよね・・

桜花「ん？フェイト！？」

あれ・・意識が・・・

フェイト「お・・・うか・・・。」

私はそのまま気を失った。

・

・

・

アルフ視点

アルフ「フェイト！！」

あたしは気を失ったフェイトの元へ来た。

そこには桜花もいた。傷もまた直してくれたみたいだ。

桜花「速く連れて行け。ジュエルシードもやるよ。管理局もこれで気づいただろう・・早く逃げろ。」

アルフ「うん・・ありがとう。桜花も気をつけてね・・お面のアイツがまた狙ってくるかもしれないし・・」

桜花「・・・う、うん・・じゃあな」

そのまま私はフェイトを背負って飛び立った。

・　・　・

三者視点

なのは「桜花君！大丈夫！？」

桜花「おーなのは・・だいじょぶ☆だって俺だもん！」

ユーノ「でもさっきの暴走はどうやって・・ああ・・あれか・・」

ユーノは、さっきの暴走を収めた件を大嘘憑きの存在に行きつき納得した。
ちなみにユーノとなのはも桜花が手伝いを申し出た時に疲労を無かったことにされたのでこのスキルを知っている。

なのは「なんか・・桜花君だからって言うのがすごく納得できるの・・」

桜花「ジュエルシード、向こうに渡したけど・・悪いね☆」

ユーノ「まったく悪びれてないのが腹立たしいよ・・！」

桜花「んじゃ帰ろうぜ！」

なのは「うん！」

ユーノ「うん・・」

そうして、今回のジュエルシード暴走は収まった・・・・

・

・

・

～フェイト家～

アルフ「フェイト・・」

フェイト「大丈夫だよ・・怪我も桜花が直してくれたし、疲労も消えてるから・・」

アルフ「フェイト！こんな無茶はもうしないでおくれよ！！あたしはフェイトが傷つくのは嫌なんだ！」

アルフは事情を知っているが故にやめようとは言わないが、無茶や無理をするのは止めようとする。

フェイト「アルフ・・うん・・分かった・・」

アルフ「・・そうかい・・じゃあ、ご飯にしようよ！フェイト！」

フェイト「うん！」

アルフが部屋を出ていくとフェイトは険しい顔に戻る
なぜなら、フェイトは無理をしないことを決めたが、内心では母の為にと焦っていたから。

桜花「ご飯！ご飯！」

フェイト「お、桜花！？なんで・・」

桜花「いや、ご飯と聞いたから食べに来た☆」

アルフ「フェイト！こっち来て！なんかテーブルに料理がいっぱい・・桜花！？」

桜花「ああアルフ、ばんわー☆」

アルフ「ああどうもーーって違うわ！！！」

桜花「晩御飯を食べに来た・・・というか作ってやったぞ！感謝しろ！」

そう言ってフェイトとアルフと一緒にリビングへ出る。

フェイト「こ、これ桜花が作ったの？」

そうフェイト達の目の前にあるのは大量の料理。しかも豪華でとてもおいしそうだ。

桜花「そーだよ！桜花君印のおいしい料理を食べる？食べるよね？
てか食え！！」

桜花のテンションについていけず唖然としている二人。しかし桜花
に勧められ料理を食べ始める。

フェイト「！？お、おいしいよ！桜花！」

アルフ「おいしー！！」

フェイト達には絶賛で桜花も満足そうにし料理を食べる。
そして、食べ終わるとお皿には米粒ほどの料理も残らず綺麗に完食
されていた。

アルフ「ごちそーさま！！！」

フェイト「御馳走様でした」

桜花「おそまつさま～」

桜花が皿を流し台に持っていき洗い始める。
するとフェイトが

フェイト「あ、手伝うよ！桜花！」

アルフ「あ、じゃああたしも手伝うよ！」

そういって三人で仲良く皿を洗う。
そして洗い終わると三人ともテーブルに着いた。

・　・　・

桜花「はー・・今日は疲れたね～・・☆」

フェイト「そうだね・・」

アルフ「はあ～・・このお茶すごくおいし～・・」

今は桜花の入れたお茶を飲みながらのんびりしている。

桜花「ふう・・じゃあフェイト～？」

フェイト「ん～なに？桜花？」

桜花「風呂入ろうぜ～？」

フェイト「うんいいよ～入ろ～」

アルフ「じゃあ、私寝てるから上がったら起こしてね～・・ｚｚｚ」

桜花と寝ぼけたフェイトは風呂へ向かう。

桜花は計画通り・・、見たいな顔をしていた。

数十秒後・・・

アルフ「・・・ってちょっと待て！！！コラ桜花あああ！！！」

アルフが気がついて風呂場へ走っていくと、そこには

桜花「あ、アルフ？起きた？」

フェイト「～♪」

服を着た桜花が裸のフェイトの髪をシャワーで洗っているところだった。

フェイトは寝ぼけているうえに気持ちがいいのが幼児化して桜花に甘えている。

アルフ「あ・・フェイト・・！！桜花・・！！おまっ・・何して・・・！！」

驚きすぎて上手く喋れてないアルフ。そんな彼女に桜花は一言こういった。

桜花「可愛いよね～こいつ。ほらアルフもよく見てみなよ」

アルフ「あ・・ああ・・確かに・・可愛いねぇ・・フェイト」

フェイト「おうか～♪」

アルフは言われたようにフェイトに視線を移すとそこには甘えるフェイトが気持ちよさそうに頭を洗われている。

桜花アルフ「「ホント、可愛いね～フェイト。」」

そこから頭を洗い、身体を二人で洗って風呂から上がったあと服を

着せてるとフェイトが目を覚ました。

桜花「ん？目が覚めた？フェイト？」

フェイト「ななななななな・・／／／／／／」

フェイトはさっきまでの事を思い出すと顔を爆発しそうなくらいに真っ赤にして固まってしまった。

桜花「なあ、アルフ？フェイトが顔真っ赤にしてるんだけど、これってやっぱ俺のせい？」

アルフ「当たり前だろうが！」

フェイト「ぷしゅ～・・・・／／／／／」

そしてフェイトはそのまま気絶した。

桜花「おっと・・寝ちゃったよフェイト。んじゃ俺は・・フェイトをベットに寝かせてくるわ。」

アルフ「うん・・分かった。じゃあリビングで待ってるから話聞かせてもらうよ？」

桜花「はいはい☆」

・

・

・

桜花はフェイトを寝かせ、リビングへ戻って来るとアルフが桜花に聞いた。

アルフ「で、なんでここに来たんだい？」

桜花「いや～言い忘れててさ。フェイトには・・話しちゃった？」

アルフ「いや・・プレシアに言われて話してないけど・・？」

桜花「そっか良かった。んじゃまずは状況と関係者について話しとこうかな！」

桜花「まず、さっきお前が言ったお面の男。それぶっちゃけ俺だから。あと、白い魔導師・・こいつは高町なのはってんだけどジュエルシードの発掘者のユーノ・スクライアって奴の協力者だ。ばらまかれたジュエルシードを回収するために行動を共にしてるわけだ。んで管理局も今回の件で動くだろうから俺は向こうの協力者として動くことにする。お面の俺は敵役、つまりフェイト側の俺ってことだな。で、フェイトとアルフはこのままなのはと対決しつつジュエルシードを集めてもらうからそういうことで！じゃ質問は？」

アルフ「ちょっと・・待って・・確認。」

桜花「おう」

アルフ「アンタがあのお面の奴の正体で？」

桜花「おう」

アルフ「あいつら・・なのは？達はアンタが散らばってたジュエルシードをまたばらまいたのを回収目的で集めてて？」

桜花「おう」

アルフ「あんたは管理局側、お面のあんたはこっち側で動くつもりで？」

桜花「おう」

アルフ「あたしたちはこのままジュエルシードを集めろと？」

桜花「おう、そんでお前たちを犯罪者にせずにまた暮らせるようにするんだよ。」

そこまで聞いて桜花は思い当たった。あれ？これ俺がかなりかきまわしてない？、と

アルフ「アンタが全部かきまわしてんじゃん！！」

しかも結構良い方に進んでるから腹が立つ。

桜花「まあまあ・・いいじゃん？大丈夫、俺に任せろ！」にこっ

その時桜花は見た者全てが安心するような広く温かい笑顔を浮かべた。

アルフ「っ・・・！！？／／／／／」

アルフはその笑顔を見て顔を赤くする。

アルフ「ま・・まあ、フェイトが幸せになるなら良いけどさっ！／／／／／」

桜花「・・・顔が赤いぞ？風邪でも引いたか？」

アルフ「なんでもない！！！」

桜花は訳も分からず首をひねるばかりだった。

・

・

・

翌日

桜花「ははは！おはようフェイト！！」

フェイト「桜花・・？っ！！？／／／／／／／」ぼん！

と言ったやり取りがあったのは別の話・・・・ではないなうん

桜花君の現状確認☆（前書き）

現状確認です。

桜花君の現状確認☆

桜花君だよ！！！今回は現状確認です。

状況

桜花君は今なのはと活動中、いずれ管理局と協力関係になるつもり。今はフェイトの家にいます。

能力的には異常・過負荷やリリカル世界の魔法を主力としていてリミッターも付いているが、１０００個ほど付けてやっとＳＳＳランクとなり、さらに３００個ほど付け今はＡＡランクとなっている。現在リミッター個数は１３１０個、約１００個はずせばＡＡＡランクに上がるため魔力量は無限近いね！！なんせ全魔力を解放したら次元断層どころが次元が粉々になるくらいだから！（結界の中なら、でもかなり強力な結界を何百と重ねた結界の中なら全開放でもＯＫ）

なのはやフェイト、まだ出てないけど管理局側はお面の桜花と普通桜花は別人と考えている。

桜花君が来たことで原作が少しだけ変わっているようだけど今のところ大きな変化は見られていない。

（作者的には無印の間は変化を与えず、Ａ，ｓ編で変化を加えるつもり。）

力関係

桜花＞＞＞＞＞＞＞（越えられない壁）＞＞＞＞＞＞＞（＞が多いので省略）＞＞＞フェイト≧なのは＞＞＞＞ユーノ≧アルフ

（管理局はのぞくがクロノはフェイト達より実力は上。）

桜花君の行動記録

リリカル世界に来る

←

能力確認、イカロスを作る。

←

ジュエルシードを意味も無く集め終える。

←

またジュエルシードをばらまく

←

フェイトの家でフェイトと素顔で会う

←

学校に転入、お昼になのは、アリサ、すずかにフラグを立てた。

←

温泉旅館やすずかの家の庭でお面の桜花君で介入

←

時の庭園でプレシアの目的を叶える

←

暴走事件を止める

←

フェイトん家で食事、一緒に風呂に入る

←

結果、フェイトとアルフにフラグを立てた。←いまここ

とまあ、今こんな感じですね。

桜花君の現状確認☆（後書き）

こんな感じです。では次回から本編です。

番外編　桜花君がＤＯＧＤＥＹＳに勇者として召喚！（前書き）

ドッグデイズの小説読んだらかきたくなった。
結構気分屋な俺☆

番外編　桜花君がＤＯＧＤＥＹＳに勇者として召喚！

～召喚！勇者　桜花君だよ！～

桜花「ふむふむ、つまり？俺はビスコッティという国の勇者として戦に参加し勝てばいいわけですか？」

ミルヒ「はい！我が国は最近の戦で負け続きで・・お願いできますか？」

桜花「いいよ」

はい、今は姫さんのセルクルっつーなんかよくわからんアヒルみたいな動物で移動中。
もちろん原作知識はもってます。はい現状確認はばっちりです。

ミルヒ「はい・・そうですよね・・そう簡単には・・っていいんですか！？」

桜花「いいって言ってるじゃないか。要するに、あの猫耳の奴ら全員叩き潰せばいいんでしょう？」

ミルヒ「は、はいそうです・・あのいいんですか？」

桜花「おもしろそうじゃん？いいよ、見てろ絶対勝たせてやっから。」にこっ

ミルヒ「あ、ありがとうございます！！／／／／／／」

～エクレールと出会い、閣下との勝負～

桜花「ちわー、勇者参上であります～す！」

エクレ「む・・騎士団親衛隊隊長のエクレールだ・・」

桜花「ほらほら、ムスっとしないの！可愛い顔してんだから笑いんしゃい！」

エクレ「んなっ・・・何を言ってるんだ！貴様は！！／／／／／／」

桜花「んで、聞きたいんだけど、紋章術ってこうやるのであってる？」

桜花の手の甲に青白い紋章が浮かぶ。

エクレ「ああ、あってるぞ。だが紋章術は体力を使う。気をつけて使え。」

桜花「オッケー。っと！？」ギィン！

桜花がどこからか飛んできた斧を持っていた黒刀ではじく。

ちなみに桜花君はなのはのときのバリアジャケットと同じ姿で黒刀と白刀の二刀流だよ！

レオ「ほお、今のを防ぐか・・だが所詮は犬姫の手下か。」

桜花「なあ、エクレ・・アイツむかつくんだけど。不意打ちしといて何見下してんの？ぶっ飛ばしていい？」

エクレ「馬鹿！あの方はレオンミシェリ姫、ガレット王国の姫だぞ！」

桜花「でも、今は敵軍の大将だろう？なら潰しても問題あるまい？」

レオ「それと、姫と呼ぶな！閣下と呼べ！！垂れ耳！それに・・」

桜花「ん？・・ああ、召喚されたゆーしゃの桜花君です。桜花様と呼べ！」

レオ「ほお、ワシを目の前にそこまで言い張るとは・・覚悟はいいな？」

桜花「かもーん、猫姫。格の違いって奴をみせてやんよ。」

レオ「まず一発お見舞いしてやる！！」ゴオオォォ！！

レオ閣下の背後に紋章が具現化する。

エクレ「あれはまずい！？勇者！！――――！！？」

エクレがレオ閣下の紋章術を見て逃げようと勇者を見ると。

桜花「なら・・・その一発ごとねじ伏せてやんよ！！！！」ゴオオォォ！！

その勇者、桜花の背後にも大きな紋章が具現化していた。

レオ「行くぞ！獅子王炎陣！！！」

桜花「はっはァ！潰れろ！エセ閣下ァ！！」

レオ「大爆破！！！！！」

桜花「おっらあああああああああ！！！！！！！」

レオ閣下の焔の大爆発が炸裂する。しかし、その大規模紋章術は――――

――――巨大な津波に飲み込まれた。

ずばっしゃあああああああああああああああああああああ！！！！！！！

司会『なななななななんと！あのレオ閣下の獅子王炎陣大爆破が！勇者の紋章術の大津波にかき消されたあああ！！？しかも当のレオ閣下も倒れ伏している――――！！！あの勇者、レオ閣下をあっさり倒してしまったあああ！！！！！』

おおおお

桜花「おふろ、おふろ、おっふっろ～♪」

かぽーん・・・

桜花「広いなおい！テンションあがるぜ！」

ミルヒ「えっ！？勇者様！？」

桜花「おっす姫さん！なんだ姫さん入ってたのか～！ん～なら一緒に入ろうそうしよう！」

ミルヒ「ふええ？！えええええ！！！？い、いえ！私はも、もう出ますから！！で、ではごゆっくり！」タタタ・・

桜花「行っちゃった・・ま、いっか」

ちなみに言っとくけど、この桜花君は高校生くらいの年齢だからね？ミルヒの肉体年齢は１５歳くらいだから、桜花君は別に欲情とかはしません。なぜならこの６００年で開き直っちゃったから～！！

”きゃああ！！！”

桜花「ん？そういえば姫さん誘拐されんだっけ・・・はあ、行きますか仕方ない。風呂の時間を邪魔した罪は重いぞ・・・」

この桜花君は大のお風呂好きなのですよ！

・・・

外

桜花「・・・・お～い、姫さん無事か～？」

「われら、ガレット獅子団領！」

「ガウ様直属秘密諜報部隊！」

「「「ジェノワーズ！！」」」

なんか、馬鹿そうな三人組が現れた。そして真ん中の娘から次々話しだす。

「勇者さま。あなたたちの大事な姫様は我々が攫わせていただきます」

「こちらはミオン砦で待ってるからなあ」

「姫様がコンサートで歌われる時間まであと一刻半。無事助けにこられますか？」

「つまり大陸協定に基づいて用心誘拐奪還作戦を開始させていただきたいと思います。こちらの兵力は２００。ガウル様直下の精鋭部隊」

「で、ガウル様は勇者様との一騎打ちをご所望です」

「勇者様が断ったら姫様がどうなるか」

桜花「つまり、姫さん返して欲しけりゃそっちの悪ガキと闘り合えってこと？」

「そうです。どうしますか？」

桜花「ん～・・んじゃあれだとりあえずその姫さんちょっと貸して？」

「あ、はいどうぞ～」

桜花「ありがと♪」

桜花のさりげない頼みで抱えられていたミルヒが桜花に渡される。

桜花「んじゃ、またね～。あとやりたきゃいつでも相手してやっから、そっちの悪ガキにこっちに出向けと伝えといて」

「ああ！！？姫様とられてる！！？」

「うかつでしたね・・なんて巧妙な・・」

「むむむ・・一旦退きましょうか・・」

と三人は去る、が

桜花「だが、逃がすとでも思っているのか馬鹿娘共」

目の前には勇者桜花が怒りの笑顔を浮かべて立っていた。

「あ、、あ・・あああ・・」

三人はその笑顔におびえている。

桜花「俺のお風呂タイムを邪魔した罪を償え！！！！くたばれ馬鹿どもおおおおおおお！！！！」

～只今、お仕置き中（バキイ！！ヤメテエ！！オラアア！！ズガガガガガガ！！ナンデソンナモンショウジュツツカエルノ！！？ギャアアアアアア！！！）～

桜花「ふう・・ああ、すっきりした♪」

ちなみにこの光景は放送中である。

三人娘「「「・・・・（ちーん・・）」」」

真っ白な三人も、すっきりした笑顔の勇者もばっちり放送済みである。

ミオン砦

ガウル「・・なあ、ゴドウィン・・俺、勇者に手ぇ出すのやめとく・・・」

ゴドウィン「それが、いいでしょう・・・」

この時ガレット、ビスコッティ問わず皆が思った。

「「「「「「「「（この勇者を怒らすのはぜっっっったいにやめておこう！！！！！！！！！！）」」」」」」」」

とね♪

その後、何日たってもこないガウルを待ちかねて桜花君が直接乗り込んでいったのは別の話♪

～後日談、レオ閣下。星詠みの変化～

レオ「あれ！？なんか今までと違ってはっきり見えるのう・・ええ！？」

そこに見えたのは、いつも見ていたミルヒの死ではなく、原因である魔物をフルボッコにしている桜花だった。

後ろでは自分とミルヒがポカーンとしている。

レオ「どこまで化け物じみておるんじゃあの勇者は・・・」

だがレオ閣下の表情はとても柔らかで憑きものが落ちたような顔をしていたという。

番外編　桜花君がＤＯＧＤＥＹＳに勇者として召喚！（後書き）

この平和な世界に桜花君なんてチート入れたら、バランスが崩れますね。
多分、番外編でくらいしか書かないんじゃないかな！

桜花君のＫＹフルボッコ☆（前書き）

やっと、桜花君がまともに戦える・・かな？

桜花君のＫＹフルボッコ☆

はいどうも！桜花君です。前回、フェイトとお風呂に入ったり一緒の布団で寝たりと結構良い感じに幸福な目にあってきました！！フェイトの髪はとてもいい匂いがして抱き心地もそこらの抱き枕とは比べ物にならないくらい良かったです。

ははは！！フェイト好きの読者！ざま―見ろ！！ちょ・・！痛い！！石投げっ！！待て待て！！その岩はしゃれになんて！！ちょっ・・！！ぎゃあああああああああああああ！！！

桜花「先生！！そうやって諦めるのはよくないと思います！！人間、愛があれば必ず通じるんですよ！！！？ならばハガキだって愛を込めて書けばちゃんと通じるでしょう！！」

アリサ「良いからアンタは黙って授業を聞きなさい！！」ばし！！

桜花「ぶべっ！！」ごんっ！

アリサの一撃で俺は机に頭からダイブした。そのまま失神したフリをしてハガキを書く。

なのは「・・・」じー

なのはと目が合った。

桜花「なのは！ここは手をかすんだ！黙ってればやり過ごせる！！」

俺はなのはに小さな声で叫ぶように頼む。

なのは「・・・わかった、いいよ」

桜花「ホントか！ありがとう！」

さて、ハガキの続きを———「せんせー、桜花君が寝たふりしてハガキ描いてます！」なのはあああああああ！！！

桜花「なぜだ！なぜ裏切ったなのはああ！！」

なのは「手は貸すって言ったけど、口は貸した覚えはないの」

桜花「ぬ、ぬかったわあああああ！！！」

先生「あの・・授業進めていい？（泣）」

そんで、まあいろいろやって放課後！時間が飛んだ？知らんがな！！
で、なんかなのは達がごちゃごちゃ騒いでます。

なのは「・・・・・」

アリサ「なのは！なにか悩んでるんだったらいいなさいよ！！友達でしょう！！？」

なのは「ごめんね・・アリサちゃん・・・」

アリサ「っ・・・！！もういい！！行くわよ！すずか！！」

すずか「アリサちゃん！？えと・・ごめんねなのはちゃん！じゃあね・・！！」

そういってなのはのもとからアリサとすずかが帰って行く。
なのははは温泉の時や暴走の時に何もできなかったことで悩んでいるようだが、実際そんなことを相談できるわけも無い。

桜花「なのは！帰るぞい！」

なのは「あ、桜花君・・うん、わかった・・」

・

・　　・

・

帰り道

桜花「・・・なのは？どしたん？」

なのは「桜花君・・私どうしたらいいのかな・・？桜花君が私を見つけた時の温泉旅館の時も、暴走の時も・・私何も出来なかった・・アリサちゃんにも心配かけて・・」

桜花「・・・」

え？これシリアスな場面？なんで俺がこんな相談受けてんの？・・・はあ・・まあいいよやってやるよ・・

桜花「なのは、アリサの件はちゃんと謝っとけ。人に言えないような悩みくらいある。そんなことは向こうだって分かってる、だからちゃんと謝って自分で解決するから心配するなって伝えろ。んで・・魔法の件だが・・・お前は何もできないわけじゃない。でもな魔法をしって数日のお前がなんでもかんでも出来たらおかしいんだよ。だからお前はお前が今できる事をしろ。」

なのは「今・・出来る事・・？」

桜花「フェイトと話がしたいんだろう？」

なのは「・・うん・・うん！分かった！！私頑張るよ！明日アリサ

ちゃんにもちゃんと謝ってみる！ありがとう！桜花君！」

桜花「おー・・ガンバッテー・・」

シリアスとかマジ勘弁・・超めんどくさいし。

・

・

・

で、現在はフェイトとなのはがジュエルシードを探し当てたところです。

なのはとフェイトが木の化け物に対峙してます。

木「がああああああああああああああああ！！！

ユーノ「なのは！！」

獣組は鎖のバインドで動きを止めてるけど・・・

さて、そろそろ介入しますか！

桜花「でええい！！！」

俺は純粋な蹴りでシールドを壊した。あれ？すっごい脆いなこのシールド。

（それは貴方が規格外なだけですｂｙ作者）

なのは「ええええええ！！？桜花君？なんでえ！！？」

フェイト「凄い・・」

ちなみに俺バリアジャケット着てません。なぜならお面の時に着てたから！フェイト達にはばれたくないんだよね～・・あ、ユーノとアルフは知ってるよ？俺が教えた。

桜花「さて、やりますか！」

なのは視点

今日は、桜花君にも励ましてもらってジュエルシード探しにも気合がはいってます。

絶対にあの子に話を聞いてもらうの！・・・？なんで桜花君あの子の名前知ってたんだろう？・・まあいいよね・・

ユーノ「なのは！！」

なのは「あっ・・！あの子・・それになにあの大きな木！？」

そこにはあの綺麗な髪の子とジュエルシードの発動した木が戦っていた。

なのは「あの！」

アルフ「！？フェイトの邪魔するな！怪我したくなかったら引っ込んでな！」

ユーノ「今は言い争ってる場合じゃない！とにかく今は封印を！！」

そういって封印しようと闘ってるんだけど・・・・

なのは「全然、攻撃が通らな～い！！」

フェイト「固い・・！！」

あの子と私の攻撃は全部シールドに防がれてしまい通らない。

すると、どこからかある男の子が木に近づいて。危ない！！と思ったら

桜花「でええい！！！」ずがああ！！

その子は蹴りで木のシールドを壊しちゃった！でたらめなの！！ていうか桜花君だし！！！

そしてそのまま桜花君は走り出して木の根や顔、枝をどこから持ってきたのか木刀で切り裂いていく。

なのは「えええええええ！！？桜花君？なんでえ！！？」

フェイト「凄い・・」

となりであの子も目を見開いてびっくりしてる。あ！今チャンスじゃない？

なのは「あの！・・貴方のお名前・・聞かせてくれない？」

フェイト「あ・・私は・・・フェイト・・フェイト・テスタロッサ・・」

なのは「わたしは・・なのは！高町なのはだよ！」

フェイト「・・・そう・・」

そしてフェイトちゃんにまた話しかけようとしたら・・

桜花「なのは！フェイト！終わったぞ封印！！」

フェイト「！？」

なのは「あ、うん！分かったの！」

桜花君が木の化け物を倒して呼びかけてきた。そして同時に動き出してフェイトちゃんと一緒に封印した。

桜花視点

桜花「ふう・・やっと終わったか・・・ん？」

イカロス『どうしましたか？』

桜花「ああ、イカロスか・・ごめんな使ってやれなくて。」

イカロス『いえ、気にしないでくださいマスター。それでどうしました？』

桜花「いやあいつらジュエルシードはさんで何してんのかな～って・・」

イカロス『原作は見たでしょう？戦うんですよ。』

桜花「やっぱ？はあ～・・暴走するぞまた・・」

イカロス『でも・・ＫＹが来ますよ？管理局の方も転送装置を起動させましたし。』

桜花「うそ、なんでわかんの！？」

イカロス『私を作ったのはマスターですよ？管理局のデータベースなんて１秒あればいくらでものっとってやれますよ？』

桜花「お前も対外バグだよな」

イカロス『あ、マスター。二人がぶつかります。それと転送、来ます！』

桜花「んじゃ行こうか！！」

桜花が飛び立つ。

三者視点

桜花がそんな感じの時、フェイトとなのはが会話をしていた。

フェイト「ジュエルシードには・・衝撃を与えたらダメみたい・・」

なのは「うん・・そうなったらレイジングハートもバルディッシュも可哀そうだもんね・・」

フェイト「でも・・譲れないから・・」

フェイトがそう言って構える。

なのは「わたしはお話したいだけなんだけどな・・」

そう言ってなのはもまた構えた。

ジュエルシードを賭けて両者が駆けだしたその時――

クロノ「二人とも武器を納めろ！ここでの戦闘は危険だ！！」

と割り込む黒い影。

二人は、それに気付き急停止をかける。だが

桜花「死ね！！このＫＹがあああああああああ！！！！！！！！！！」

すっぱあああああああああああああああああん！！！！！！！！！！

桜花「知るか！邪魔も何もねえよ！邪魔したのはむしろそっちだろうが！！！！」

クロノ「くっ・・これは公務執行妨害だ！よって君を逮捕する！！」

桜花「やれるもんならやってみろや・・くされＫＹ」

クロノ「この！！！」ドドドド！

クロノは魔力弾を桜花に向けてはなった。一般人の桜花に向けてである。

桜花はそれをあえて受ける。

ずがあああああああああん！！！！！！！

なのは「桜花君！！？」

フェイト「桜花っ！？」

二人とも、直撃した桜花を心配する。

しかし煙が晴れて出てきたのは――――

桜花「全然、聞かねえなァ！蚊が止まったみたいだぜ！！」

ーーー無傷の桜花であった。

そこから桜花の一方的な過剰防衛（ワンサイドゲーム）が始まる。

桜花君のＫＹフルボッコ☆（後書き）

フルボッコにはならなかったですね・・・！

でも次の頭からはちゃんとそうなってます。

では次会いましょう！

桜花君のＫＹフルボッコ☆２

どうも、桜花君だよ！前回はこの小説サイトでもＫＹと知られる管理局の執務官、クロノ・ハラオウン君１４歳にハリセンを叩きつけたんだ！で、今はね？なんと・・・

桜花「死ね死ね死ね死ねぇえええええ！！！！！！！！」

ズガガガ

フェイト「・・・死んでないよね？」

桜花「ん～？知らない☆なら確かめてみようよ！」

なのは「確かめる・・？」

ユーノ「どうやって？」

アルフ「そんなの普通に起こせばいいじゃないか」

桜花「そーそー、普通に起こせばいいんだよ☆」

桜花はクロノに近づいて――――その腹を思いっきり踏みつけた。

クロノ「ぐぶううおあ！？」

クロノが飛び起きた。

なのは「桜花君・・酷過ぎなの・・」

フェイト「そこは普通に起こそうよ・・」

桜花「んじゃ、イカロス通信妨害と音声妨害解除☆」

イカロス『ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．全妨害結界解除。』

ブウン！

そんな音がしたと思ったら。

ーーーノ！！ーーロノ！！ーークロノ！！！！！』

と通信が入る。

そう、皆おなじみリンディ提督だよ！

クロノ「げほっ。・・げほげほ！！！か、母さん！？あ、いや提督。」

リンディ『クロノ！大丈夫なの！？クロノ！！』

桜花「なんであんなに必死なのあの人・・？」

イカロス『まあ、通信と音声は妨害してましたが、映像は伝わってましたからねぇ・・母親としては息子が死にそうになる映像はきついものがあるのでしょう。』

桜花「あ、そういうコト？でもちゃんと非殺傷にしてたよ？俺はそこんところ抜け目ないからね！」

イカロス『でも、あの４９３８２１発中１２発は殺傷モードでしたよ？』

桜花「そう？でも生きてんじゃん？いいっしょ？」

リンディ『良いわけないじゃない！！』

桜花「うおっ！！？誰？」

なのは「桜花君、話し聞かないと駄目だよ？」

おや・・フェイトは逃げたみたいだねぇ・・それになのはも何かしら説明を受けたようだね・・

桜花「ふ～ん・・とりあえずあれだろ？管理局に連れて来いみたいなもんだろ？」

なのは「え、なんで！？よくわかったね・・」

リンディ『・・まあ、いいわ治療も戦闘中にしていたようだし・・それで来てくれるかしら？』

桜花「え～・・だが断る！」

なのは「え・・一緒に行こうよ～・・」うるうる

なのはがうるうるした涙目で俺を見ている・・しかも上目遣いと来た。

ま、最初から行くつもりだったんだけどね☆

桜花「ん？いいよ☆」

なのは「やった♪一緒なの♪」

・　・　・

艦内

で、管理局内に転送された俺こと桜花君です。

桜花「来たよ！んじゃあそぼあそぼ☆」

クロノ「ああ、それじゃ公園にでもーーって違う！！」

桜花「クロノ君的には公園がブームなんだね！意外と可愛いところがあるじゃないか☆」

読者達よクロノ君は公園が好きみたいだよ！！！

クロノ「ちがっ・・なんだ君達！その温かな眼は！母さんまでそんな眼で見ないでください！！」

リンディ「クロノ・・こんど遊園地にでも行きましょうね・・」

なのは「クロノ君・・」

ユーノ「クロノ・・・」

あ、ちなみにユーノくんはもう人間の姿に戻ったよ！その際女性陣から淫獣として冷やかな目線で見られたけどね☆

とりあえずクロノ君と同じ目に会ってもらったよ！

リンディ「それで・・本題に入りましょうか。まずなぜ貴方達はロストロギア、ジュエルシードを集めていたのかしら？」

そんなこんなでリンディさんが本題に入る。

なのは「あの・・ロストロギアってなんですか？」

ユーノ「過去に何らかの要因で消失した世界、または滅んだ古代文明で造られた遺産の総称だよ。ジュエルシードもその一つなんだ。」

とユーノがロストロギアについてなのはに説明する。

なのは「へ～・・・」

とそういった後、ユーノが自分の出身世界とジュエルシードへの関係、なのはとの出会いやその経緯を話す。

ユーノ「・・・それで、僕が回収しようと・・」

リンディ「そう。立派だわ」

クロノ「だが無謀でもある。」

ユーノ「うぅ・・・」

一旦、リンディのほめ言葉で喜ぶユーノだったがクロノの言葉でまた落ち込むユーノ

桜花「ははは、回収の遅れた管理局がなにをいってるのやら☆」

クロノ「うぐっ・・た、確かにそうだが・・」

リンディ「それはすまないと思っているわ・・それで、ジュエルシード回収に関しては管理局が全権を持ちます！」

ユーノ「え！？」

なのは「え・・・！？」

桜花「ふ～ん・・よし、帰ろうなのは、ユーノ。管理局がなんか全部やってくれるんだって！行こ！」

そして、その言葉を聞きなのはとユーノが驚くが桜花は二人の手を取り転送装置のもとへと歩いていく。

なのは「お、桜花君！？」

ユーノ「ま、待ってくれ！あれはぼくも回収を手伝いたいんだ・・！！」

桜花「黙れ・・良いから早く着いてこい・・・こんなクソの集まりに手を貸すことはない、今まで通りやる。」ぼそっ

そう桜花にささやかれ、ユーノとなのはは困惑するが手は掴まれて

るためどんどん引っ張られていく。

リンディ「まあ、待って。」

とそこでリンディに呼びとめられる。

桜花「・・・・なんだい？そっちが全部やってくれるんでしょう？」

リンディ「っ・・そうだけど、急に言われても心の整理がつかないでしょう？また明日ここにきて話しましょう？」

桜花『ふ～ん・・』

ズドドドド！！！！

と桜花の口調が某過負荷調になり、リンディの体に数本の大きな螺子が捻子込まれる。

リンディ「がっ・・はっ・・・・」ずるずる・・

リンディは壁に叩きつけられ、引きずるように座り込む。

桜花『あはっ、会話中なら攻撃されないと思った？』

『自分の陣地なら攻撃されないと思った？』

『僕がまだ子供だから油断してた？』

『なのはやユーノの気持ちを考えて丸めこめると思った？』

『あめぇよ』

桜花は突き刺さる螺子を引き抜く。

なのは「？」

なのはには認識阻害魔法でこの光景が見えていない。普通の光景に見えている。

ユーノ「なっ・・・！？桜花・・！？」

クロノ「母さん！母さん！！！」

クロノがリンディに呼び掛ける。

がそんなのに構わず桜花は全ての螺子を引き抜いた。

桜花『が』『その甘さ、嫌いじゃないぜ』

と次の瞬間リンディの怪我や周りの血が無かったことのように消え

失せる。

リンディ「な・・なにが・・？」

桜花「正直に言ったらどうです？手伝ってくれと。自分の有利な状況を作ろうとするな。いいか俺達が手伝ってやるんだ、はき違えんな・・・」

リンディ「っ！！？・・・そ、そうね・・すまなかったわ、ジュエルシード回収の為に私たちに手を貸して下さい。」

なのはの認識阻害を消す、だが今のお願いは聞こえていた。

なのは「はい！よろしくおねがいします！！」

ユーノ「・・・よろしくお願いします。」

ユーノとクロノは今の光景が信じられず俺を睨んでいる。・・・まあ、どこ吹く風なわけだが☆

桜花「いいよ☆手伝ったげる。じゃあ、また明日集合でいいかな？」

リンディ「ええ、親子さんにも許可を貰わないとね？」

クロノ「・・・はあ・・分かった明日はぼくが迎えに行くさっきの公園に来てくれ。」

なのは「はい！」

ユーノ「はい！（桜花？あとで話を聞かせてもらうよ？）」

桜花「（ん？うんいいよまたあとでね。）」

リンディ「では決まりですね。クロノ、転送装置の準備を」

クロノ「はい、じゃあこっちの此処に乗ってくれ」

三人で指示に従いそこに乗り込む。そこで俺は振り返り。

桜花『じゃあ、また明日とか♪』

転送された。

・

・

・

桜花「んじゃ、さっきの事について話そうか？ユーノ？」

ユーノ「桜花・・・・君は一体・・」

――――――――――――――一体、なんだ？

その言葉に桜花は不敵に笑う・・・

桜花君のＫＹフルボッコ☆２（後書き）

あれ？なんか変な雰囲気になったぞ？

次回にはこの雰囲気を元に戻すぞ！

桜花君の肩すかしのネタばらし♪

どうも、桜花君です。前回、リンディさんとクロノを肉体的かつ精神的に追い詰めてみたよ！
で、結果的にはこっちの有利な立場で協力関係になりました！なんかそれでユーノに問いｔ「桜花・・君は一体・・・なんだ？」ちょっ・・地の文がまだ続いてるでしょ！！

桜花「・・・・・ニコッ♪」

ユーノ「・・・・ッ・・君は・・・！」

桜花「ああ、俺が何者かって話だっけ？」

ユーノ「・・そうだよ・・君は始めから訳が分からない・・いきなり現れたと思ったら、変な力でなのはを治療するし・・またいきなり現れたと思ったら、協力したいと言いだす。おまけにさっきの管理局でのやりとりだ・・本当に訳が分からないし何がしたいのかもわからない・・・」

桜花「・・・あれ？なのはは？」

ユーノ「え？・・・あれ！？なのは！？・・・？」ぺらっ

ユーノが地面に小石で固定されている紙を見つける。
そこには、こう書いてあった。

『なんか、難しい話になりそうだから先に帰ってるね！ユーノくん

も晩御飯には帰ってきてね！　　なのは』

桜花「・・・帰ったな・・なのはの奴・・」

ユーノ「うん・・・・んん！ごほん！あー・・まあ置いといて・・正直に答えてくれないか？君は何者で・・何が目的なんだ？」

桜花「ん～？俺は、風華桜花だ・・鳴海で生まれた魔導師の才能をもった男だよ？で、まあ・・・これ言ってもいのかな・・？まあいっか。俺は一京以上の希少能力（レアスキル）を持ってるんだ☆」

ユーノ「一京ッ・・！？そんなッ・・！！？」

桜花「目的は～・・・ん～・・目的ねぇ・・・・」

ユーノ「・・・・？」

桜花「目的って言ってもこれと言ったものないよねぇ？イカロス？」

イカロス『ですね。マスターは基本考えなしですもんね』

ユーノ「ええ！？」ズルッ

この桜花の発言にユーノは肩透かしを喰らい、こける。

ユーノ「目的ないんかい！！」

桜花「ないな！あえて言うなら・・暇つぶしかな？」

ユーノ「暇つぶし!?ジュエルシードはいらないの?これ聞くのなんだけど!」

桜花「ジュエルシードねぇ・・・ふむ」ひょい

桜花は、どこからかジュエルシードが5つほど入った瓶を取り出す。

ユーノ「それはっ!?・・ま、まさか!?」

桜花「ジュエルシードならもう持ってるしねぇ・・ん?どうしたユーノ?」

ユーノ「あのなのはと対峙した思念対発動したジュエルシードの時・・お面の子は全てのジュエルシードを持ってた・・」

桜花「あ〜・・それ俺だわ。言うとジュエルシードまたばらまいたのも俺。」

ユーノ「・・・はあ・・もう君には呆れるよ・・」

桜花「おいおい、ユーノ?そこで諦めるなよ?前向きに行こうぜ、考えてみろ。今お前と協力関係に居る俺が、お前の求めてるジュエルシードを5つも持ってるんだぜ?」

ユーノ「じゃあ、それを譲ってくれるの!?」

桜花「だが断る!!」

ユーノ「なんでさ!?」

桜花「なぜならそっちの方が面白いから（某はかせ風）」

ユーノ「はあ・・もういいよ・・あ！じゃあさっきの管理局のでのたちまわりはなんで・・？」

桜花「ああ・・あれか、あれだあいつらの言い方を良く考えてみろ。あの言い方をして明日になればなのはやおまえは絶対に協力をさせてくれと言いに行ったろ？」

ユーノ「そ・・それはもちろん・・」

桜花「それじゃあ、向こうの思うつぼなのだよユーノくん！なぜなら向こうの思ってることがこうゆう事だからさ！」

桜花がこういったとたん目の前に大画面が現れる。
そこにはリンディの思惑を図にしたものが書いてある。

桜花「言いか？あいつら管理局はな？今とてつもない人員不足だ。とはいっても、これは人数不足ってわけじゃない。これは能力の高い者が不足してるんだ。だから、こんな管理外世界のこんなところにいた才能あふれるなのはと高い補助スキルをもつユーノに目をつけた。」

ユーノ「・・・あ、そういうことか！」

桜花「そう・・つまりあいつらはお前らを自分達の命令を聞く立場に置いてこの事件に協力させ、今後も自由に動かせるようにしたかったのさ！」

ユーノ「・・・そうか・・だからあの時桜花は攻撃を・・・でも、

だからってやりすぎだろ！！」

桜花「・・・てへ☆」

ユーノ「てへ☆じゃないよ！！それにその後のあれはなんだい！？怪我がいきなり治って・・」

桜花「まあまあ・・殺しちゃったけどちゃんと生き返らせたからいいじゃないか！」

ユーノ「生き返らせたァ！？」

桜花「んじゃあ、またね！！」

そういって桜花は取り合わずに去って行った。

ユーノ「・・・行っちゃった・・・それにしても聞いていた大嘘憑き・・死者の蘇生まで出来るスキルなんて・・それに他にも一京以上のスキルがあるなんて・・まるで、歩くロストロギアじゃないか・・・うん、敵にはまわしたくないな・・」

ユーノのつぶやきは風に消えた・・・・

・　・　・

桜花視点

桜花「あははは！なんかすごいネタばらしをしたけど・・ばれてないよね？」

イカロス『はい、映像妨害、音声妨害、通信妨害、認識妨害他もろもろの結界を張りましたので、管理局にはバレていません』

桜花「そっか、ならいっか。・・考えたんだけどさこの一京のスキルあればさ、魔法とか無しでも管理局潰せるんじゃない？」

イカロス『ですね。本局やアースラ、それに各支部で『荒廃（ラフラフレ）した腐花（シア）』を発動し続ければ良いんじゃないですかね？』

桜花「・・ま、やんないけどね？」

イカロス『それが賢明な判断です。管理局と言っても一応この存在がないと次元世界が崩壊しますからね。』

桜花「さて・・これから何するよ？」

イカロス『んじゃあ、プレシアん所にご飯食べに行ったらどうでしょう？』

桜花「だね～・・もうすぐご飯時だしね。」

腹も空いたし、行こうかな。

桜花「転移してくれ。」

イカロス『了解、転移！』

時の庭園

桜花「よっと・・」

プレシア「あら・・桜花じゃない・・」

そこにはフェイトとプレシアがいた。折檻していたようだ。アリシアが見てることから痣や怪我の残るものではないようだ。

フェイト「えと・・母さん？どうして・・？」

桜花「どうした？フェイト？」

桜花はフェイトに近づき頭に手を乗せる。

桜花「ふむふむ・・ああ、なんかいつもと折檻の勢いが違うから困惑してるのか。」

フェイト「えっ！？なんで・・って桜花？」

桜花「そーだよ。桜花君だよ☆」

フェイト「おおおおおお桜花！？／／／／／／」

桜花「そーだよ。桜花君だよ☆」

フェイト「本当に・・桜花？／／／／／／／」

桜花「そーだよ。桜花君ｄ「その辺にしなさい。何回続けるの！？」あはは☆」

フェイト「・・・あれ？でもなんで・・・？」

プレシア「そうね・・なんでここに来たの？」

桜花「いや皆でご飯でも食べようかなと。」

プレシア「ああ・・まったく・・・いいわよ、来なさい。」

そう言ってプレシアちゃんが奥の部屋に入ってく。

フェイト「・・・・母さん・・・・」ぼそっ

んん？なんかフェイトが落ち込んでるぞ？一緒にご飯食べたくないのかな？

桜花「どうしたフェイト？」

フェイト「い、いや！なんでもないよ！・・・・・そ、それじゃ、私は帰るね・・」

くるりと踵を返して出ていこうとするフェイト、アルフもフェイトに寄って来る。あれ？なんで出てくの？

桜花「待てよフェイト。なんで出てくの？」

フェイト「え？だって・・もう母さんに報告は」

桜花「そうじゃなくて、なんでご飯食べるって言ってんのに帰るの？」

フェイト「え？だって桜花と食べるんじゃ・・？」

桜花「ああ・・もういいやオラこっち来い。」

フェイト「ふぇえ！？／／／／／」

俺はフェイトをお姫様だっこして奥の部屋に入る。

プレシア「あら遅かったわね桜花、フェイト。ほらアルフも来なさい、桜花の料理はおいしいわよ。」

アリシア「はやく！フェイト！」

フェイト「・・え？母さん・・？えと・・その子は・・？え？」

フェイトは凄く困惑している！どうしますか？
決まってる。このままなにも教えずにご飯食べる。

桜花「フェイト？ほら此処座って！」

フェイト「あ、うん・・」

俺はフェイトを隣に座らせる。前にはプレシアとアリシアが座っている。

桜花「んじゃいただきまーす。」

プレアリ「「いただきます／まーす！」」

フェイト「え・・いただきます・・」

そうして食べ始める４人＋１匹

フェイト「あ・・おいしい。」

アリシア「おいしー！！」

桜花「ふふふ・・まだまだだなプレシア・・」

プレシア「くっ・・この漬物なら・・！！」

桜花「なら俺はそれに対してこの卵焼きを出すぜ！」

プレ桜「「フェイト！アリシア！どっちがおいしい！？」」

フェイト「え？うん・・むぐむぐ・・・あ、桜花の方が・・」

アリシア「お兄ちゃんの方がおいしい！」

プレシア「・・・・ｏｒｚ」

桜花「諦めろプレシア・・俺の・・勝ちだ！」

・・・それにしても・・フェイトはまだアリシアには会ってないのか？

桜花「フェイト。フェイトっアリシアと会うのって初めて？」

フェイト「え？うん。えと・・？」

桜花「この子はアリシア。言いづらいんだけど・・・お前の姉にしてお前の素体だよ。」

フェイト「え・・？素体って・・？」

桜花「いいかフェイト。よく聞いてくれ。お前は、いわばクローン人間だ、そして元となった人間がこのアリシア。つまりプレシアの娘だ。」

それから俺はプロジェクトフェイトの事、アリシアの死、プレシアの目的の事を全部話す。

フェイト「そ・・そんな・・あれ？でもアリシアは生きてるよ？それじゃジュエルシードはもういいんじゃ・・？」

桜花「うん、アリシアは俺が生き返らせた。ジュエルシードはお前達親子が犯罪者にならないために集めてるんだよ。」

フェイト「そうなの？」

プレシア「ええ、そうよフェイト。いままで悪かったわね・・これからはアリシアとフェイト・・仲良く三人で暮らしていきましょう

？・・・ダメかしら？」

フェイト「いや！だめじゃない！私も・・母さんや・・ね、姉さんと暮らしたいです・・」

桜花「良かったなフェイト？」

フェイト「うん！ありがとう！桜花！」にこー

おうふ・・フェイトの笑顔が眩しいぜ・・

アルフ「あんた・・いい奴だねぇ・・ぐす」

アルフが泣いていた。なぜ泣くんだ、良い結果じゃないか！

桜花「はあ・・んじゃ、引き続きジュエルシードをよろしく。管理局の協力者になったから形式上はお前らの敵になる。でもお面付けてる俺はお前らの味方だからよろしく。・・あ、お面の時は・・そうだね・・ライアーと呼んでくれ！」

プレシア「あら・・もう帰るの？泊まって行ったら？」

桜花「いやでも・・ん？」くいくい

アリシアとフェイトが俺の袖を掴んでいる。

桜花「どうした？フェイト、アリシア？」

フェイト「その・・もう少し一緒に居たいな・・／／／／／」

アリシア「泊まらないの？・・・・」うるうる

ぐはっ！！フェイトの上目使い攻撃＋アリシアの涙目攻撃がクリティカルヒット！！！

桜花君に９９９９９９の精神ダメージ！！！

桜花「分かった・・泊まらせてもらうよ。」

フェイト「やった！」

アリシア「じゃあ今日は一緒にお風呂に入ろう！お兄ちゃん！」

プレシア「それは駄目よアリシア！」わたわた

ははは、忙しくなりそうだな・・・

その後、お風呂に真っ赤になったフェイトと笑顔のアリシアが突撃してきたり、布団にアリシアが潜り込んでいたりと事件が勃発したのは別の話☆

桜花君の肩すかしのネタばらし♪（後書き）

くそ！桜花め！二度もフェイトとお風呂に！あげくアリシアまで！！

次回はなのはとフェイトの決闘です。桜花君の介入は・・・

桜花君の殲滅封印砲と嘘だらけの供述（前書き）

ん・・・・今回から〇〇「〜〜」形式をやめようと思います。
〇〇の部分を消して台詞のみ。
なんかそっちの方が他の小説にも多用されてるしね！
さあ頑張ろう！

桜花君の殲滅封印砲と嘘だらけの供述

はい、桜花君だよ！今はライアーちゃんだよ！プレシアの家で過ごして約一週間！
フェイトとなのは達管理局は各々ジュエルシードを手に入れるために探していました。俺？お面の時は魔法、素の時はレアスキルと使い分けて手伝ったよ？んで、急にみつから無くなってフェイト側は残りが海にあると判断して強制発動させることにしたんだ☆

「アルカス、クルタス、エイギアス・・・ぶつぶつ・・」

アルフが心配そうにフェイトを見てる。これも原作通り、おそらく管理局も見てるんだろう。
ちなみに今の俺はフェイトの隣でアルフ同様に待機してます。もちろんお面付き、ＮＡＲＵＴＯの世界で手に入れた影分身を使ってなのは達の元にも分身を置いてます！

「はあああああ！！！！！」

ピッシャアアアアアアアアアン！！！！！！！

魔力の電撃が海に叩きつけられる。

「見つけた・・！！残り・・６個！！」

「フェイト、大丈夫かい？いくらなんでもこれを封印なんて今のフェイトじゃ無理だよ・・！！」

「案ずるな―！アルフよ。そのための俺様だぜィ！」

「え？」

はははよくわからないって顔をしている。ココからは俺の独壇場。つまり俺が封印するってことだよ☆

「イカロス！行けるな？」にやり

『もちろん。』

イカロスと俺は不敵に会話を交わす

「んじゃ・・・イカロス！大規模広域殲滅砲撃魔法！セット！」

『了解！広域殲滅魔道砲、タイプａｌｐｈａ（アルファ）！』

イカロスがそういうと、フォルムが変わる。
光に包まれたイカロスが姿を現す・・それは、桜花の腕に装備された大太刀。
まあ、ぶっちゃけると某死神の使う最後の月牙〇衝の状態？

「こ、これは・・ライアー・・なの？」

フェイトはそう問いかけてくる、姿が大きく変化していたからね。
今の俺は深い青色だった紙が漆黒に染まり腕の大太刀は黒い魔力が渦巻いている。瞳も黒くなっている。

「なんだい・・？その状態は・・それもアンタのレアスキルなのかい？」

アルフがそう言うと、俺は軽い調子で言う

「そ。イカロスの3つあるモードの一つalphaタイプ、広域殲滅を司るモードだよ♪」

そう言って俺は上空高くに上昇し、ジュエルシードを見据え・・魔力を大太刀に込める。

ズズズ・・・

「おっとぉ？あぶねぇこれ以上ためると次元震起きるな。」

『気をつけてくださいよ、ただでさえ貴方は規格外なんですから・・』

これでも1割行かないんだけどな・・・しょぼーん・・

「わるいわるい・・んじゃ行きますか！イカロス、チャージは完了した・・行くぜ？」

『了解・・いつでもどうぞ。』

俺は魔力のこもった大太刀をふるう、するとその剣圧で衝撃が起こり海が斬れる、すぐに元に戻ったけど。

「・・・ふっ！！！！」

ブン！！！！！！！

「イカロスｔｙｐｅ”Ａｌｐｈａ”大規模広域殲滅魔法『無月』発動。」

桜花が大太刀を振り下ろした瞬間――――――――――――目の前は漆黒に包まれた

・

・

・

アースラ

・・・フェイトが強制発動をさせた頃・・・

「すごい子ねぇ・・」

リンディがそう言う。桜花君はもちろん静観してるよ☆だって分身だもん！

「だが無謀すぎる！」

画面にはフェイトが疲弊した様子が見える、それを見たなのはが言った

「あの！私、フェイトちゃんの所へ行きます！」

うん、良い判断だと思います。でもねＫＹは空気を呼んではくれないんだよ！

「いや、行く必要はないよ。」

「え？」

「このまま監視して疲弊したところを叩けばいい。」

「そんなっ！！」

いい加減このＫＹ野郎は調教しないと駄目かな？なのは式のＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ！でも良いけどさ♪

「残酷に見えるかもしれないけど、私たちは常に最善の判断をしなければならないの。我慢してください。」

リンディがそう言う、だがしかし！そうは問屋がおろさんよ！！！だろう？わが本体よ！

「無駄だと思うけどなぁ？あのお面の奴が凄いことしてるけど？」

そういってやると皆が画面を見る、そこにはイカロスを解放した本体の姿。

「なんだ！？あの姿は！！」

「艦長！あのお面の子の魔力反応！どんどん大きくなっていきます！推定測定値・・測定不能です！！」

クロノが驚愕し、エイミィさんが報告する。

「つまり・・ＥＸランクってわけね・・？」

「ＥＸランクなんて・・そんな・・馬鹿な・・」

クロノがなんか驚いてるけど知らない。

「お？なんか大技出すみたいだよ？」

――――――『イカロスｔｙｐｅ”Ａｌｐｈａ”大規模広域殲滅魔法『無月』発動。』

その台詞が画面から聞こえると共に画面は黒く染まった。

・　・　・

「やた☆ふーいんかんりょー♪」

「いやいや！やりすぎだろ！！」

「あれ？でもなんで私たちは無事なの？巻き込まれたんだはずなんだけど・・・」

「それはだなフェイト！この技は自分が敵、または障害と認識した者にしかダメージを負わせないのだ！だからフェイト達は無事というわけなのです☆」

「本当・・規格外だね、桜k・・ライアーは・・」

フェイトが呆れている。おいおい本気出したらこんなもんじゃないんだぜ？

「おいおい本気出したらこんなもんじゃないんだぜ？」

「アンタ、声が漏れてるよ」

「本当・・規格外だね、ライアーは・・」

ははは・・おや？どうやら管理局が来たようだ。

「そこまでだ！君たちを次元犯罪者として逮捕する！」

さて、ここからが本番だ。

時の庭園

「さて、終わったわね・・行きましょうアリシア」

「うん・・大丈夫だよね？フェイト・・」

「大丈夫よ・・桜花がついてるから。さあ行きましょう」

私達はこれからこの時の庭園を消滅させてフェイト達と一緒に管理局の元へ行く。
桜花からの合図が先程届き、今はもう崩壊させる準備も整い出発するところ。アリシアはフェイトが心配みたい。

「お母さん・・」ぎゅ

「大丈夫、大丈夫よ・・じゃあ行くわね、転移魔法発動・・！！」

・　・　・

「そこまでだ！君たちを次元犯罪者として逮捕する！」

「いーよ☆」

「抵抗するなら・・・え？」

「いいって言ったんだよＫＹ。あ、ちょっと待ってね。あ、来た。」

ピカッ

光ったと思ったらプレシアとアリシアが転移してきた

「タイミングばっちりだね。プレシア」

「ええ、ちゃんと見てたもの」

「お兄ちゃん・・」

おう・・アリシアは不安そうだね・・

「大丈夫。俺がここにちゃんといる。」

「あの・・私たちはどうすればいいですか？」

フェイトが話を進める、クロノは一瞬呆けていたが気を取り直した

「あ～・・とりあえずアースラへ来てもらう。ついてきてもらおう・・艦長。」

『ええ、転移装置作動。アースラへ送還！』

・　　・

・

・

「っと・・」

無事にアースラへと来れたみたいだ。

「っ・・」ぎゅ

「アリシア、おんぶしてあげる。ほら乗って。」

アリシアは不安が積り泣きそうになっている。ここは安心させるためにも人の温もりを与える。

「うん、えへへ・・」

「うんうん、多少は緊張も解けたみたいだね！大丈夫、俺が守るから大丈夫だよ☆」

「あ～水を差して悪いが・・そろそろいいか？艦長の元へ案内するから付いてきてくれ。あ、武装は解除してくれるか？」

む・・このＫＹが・・お前のせいでアリシアがビビってんだろうが・・ったく・・

そう思いながらもバリアジャケットを解除する。

で、しばらく歩くとある部屋につく。

「ここだ。じゃあ、入ってきてくれ。」

「ういーす。おっじゃま～♪」

「おじゃまします」

「おじゃまするわ」

上から俺、フェイト、プレシアだ。誰が一番行儀がいいか分かる？俺だよ！・・嘘です。多分フェイトです。

で、中には分身の俺、なのは、リンディ、エイミィをはじめとする局員方がいてこっちを見ている。

「・・初めまして、アースラ艦長のリンディ・ハラオウンです。」

「あ、どーも。ライアーって偽名名乗ってます。よろしく」

「フェイト・テスタロッサです。こっちは使い魔のアルフ」

フェイトが俺に続いて言う、アルフも軽く頭を下げる。

「プレシア・テスタロッサよ。ライアーの背中に居るのは娘のアリシア・テスタロッサよ。」

「そうですか、ではお話を聞きたいのですが。よろしいですか？」

「ええよ☆」

そこから事情聴取が始まった。

「まず、なぜジュエルシードを集めていたのですか？」

「え？そ・・それをお前らが聞くのか・・！？それを・・お前らが・・き、聞くのか・・！？」がくがく

「え・・ええ？それが・・なにか・・？」

無駄に壮大そうに反応する俺。リンディ達管理局側は息をのんでいる。フェイト達は内心呆れている。

「それは・・・・」

「それは・・？」

「慈善活動だよ」

「ええ！？」がくっ

リンディ達がずっこける。面白い・・w

「ためた割にはさらっと言ったわね・・」
プレシアがため息を吐いてそういった。
「ごほん・・ええと、それはどうゆうことですか？」
「なんかな～？ジュエルシードがあっちにばらまかれたじゃん？なんか事故って？」
「ええ・・」
「で、その事故をプレシア達親子はまあ、偶然知ったんだよ。」
「ふむふむ・・」
「で、ロストロギアが21個も一つの世界、それも一つの街に散らばってるとなれば危険だ。死人が出るかもしれない！？」
「・・・・」
「ヤバいよ！じゃあ、早く回収して封印しないと！！って訳で、集めてたわけだ。」
嘘だらけの説明をしてやった。するとリンディはこう返してきた。
「じゃあ、なぜ管理局の協力者であるなのはさんと敵対したの？」
「そんなの怪しいからに決まってるじゃないか」

だが一蹴する俺！！

「怪しい？」

「そ、だって始めは管理局でもなんでもない魔導師がさ？訳も分からん喋る動物連れてジュエルシードをよこせって言うんだぜ？そりゃ怪しいだろ？」

「う・・確かに・・」

「そしたらよ、悪用しようとする輩かも・・と考えて迎撃したわけだ。ま、管理局の協力者と知ったのは最近だけどね。」

「そう・・じゃあ、貴方は何者？」

おお・・遂にこの質問がきたか・・だがその前に

「その前にこの話を聞いてプレシア達の身柄はどうなる？」

「ああ、多分こちらの保護観察という形になると思うわ。過程はどうあれ慈善活動だった訳だしね。次元震も起こしてないし。」

「そうか・・んじゃ俺の事は全部事後処理が終わってからにしてくんない？。」

「え・・？ああ・・まあ・・・いいでしょ。それじゃあクロノ、報告書をお願いね。」

「はい」

とそう言ってクロノは報告書を作りに部屋を出ていった。さて、こっからはなのはとフェイトのお友達フラグを立てねば！
分身！行けるな？そう目で分身に指示を出す。了解の意が帰ってくる。

分身視点

本体とアイコンタクトを取った後なのはに話しかける。
「なのは、フェイトと話があるんだろ？行って来いよ。」
「え？あ！うん！行ってくる！！」
なのはがフェイトの元へ駆けよる。
「あ、あの！フェイトちゃん・・」
「あ・・あの時の・・」

頑張れ！なのは！！

「あの・・あのね！わたし・・いろいろ考えたんだけど・・フェイトちゃんの友達になりたいんだ！」

「え・・？えと・・その・・！」

フェイトがわたわたしている。
そこに本体のフォローが入る

「ああ、じゃああれだ。フェイトとお前で勝負してみればどうだ？ちゃんと決着も付いてないだろ？」

ナイスだ、本体！

「あ、そう・・ですね！フェイトちゃん、私と勝負してくれる？最初で最後の・・本気の勝負！！」

「えと・・・え？」ちら

本体を伺うフェイト。

「フェイト、やってやれ。全力で勝負したすれば・・きっとお前も始められるはずだ。」

「・・・うん・・やってみる！」

そうして、フェイトとなのはの決着をつける勝負が始まる。全てを最初から始めるために。

鳴海市、海上

「いいか？勝負は基本自由。相手をノックアウトさせた方の勝ちだ。」

「うん！」

「分かった・・」

なのはとフェイトがうなずき、俺は勝負開始の合図を出す。
いつまでシリアスモードしないといけないんだろう・・

「んじゃ・・始め！！」

と同時に、両者が空へと翔けて行った。

桜花君の殲滅封印砲と嘘だらけの供述（後書き）

あ、言い忘れてたけど。
描き終えたら挿絵を更新していきます。
一話に一枚くらいね！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6384z/

世界を周るは転生者(チート)ｉｎリリカルなのは

2012年1月4日07時48分発行